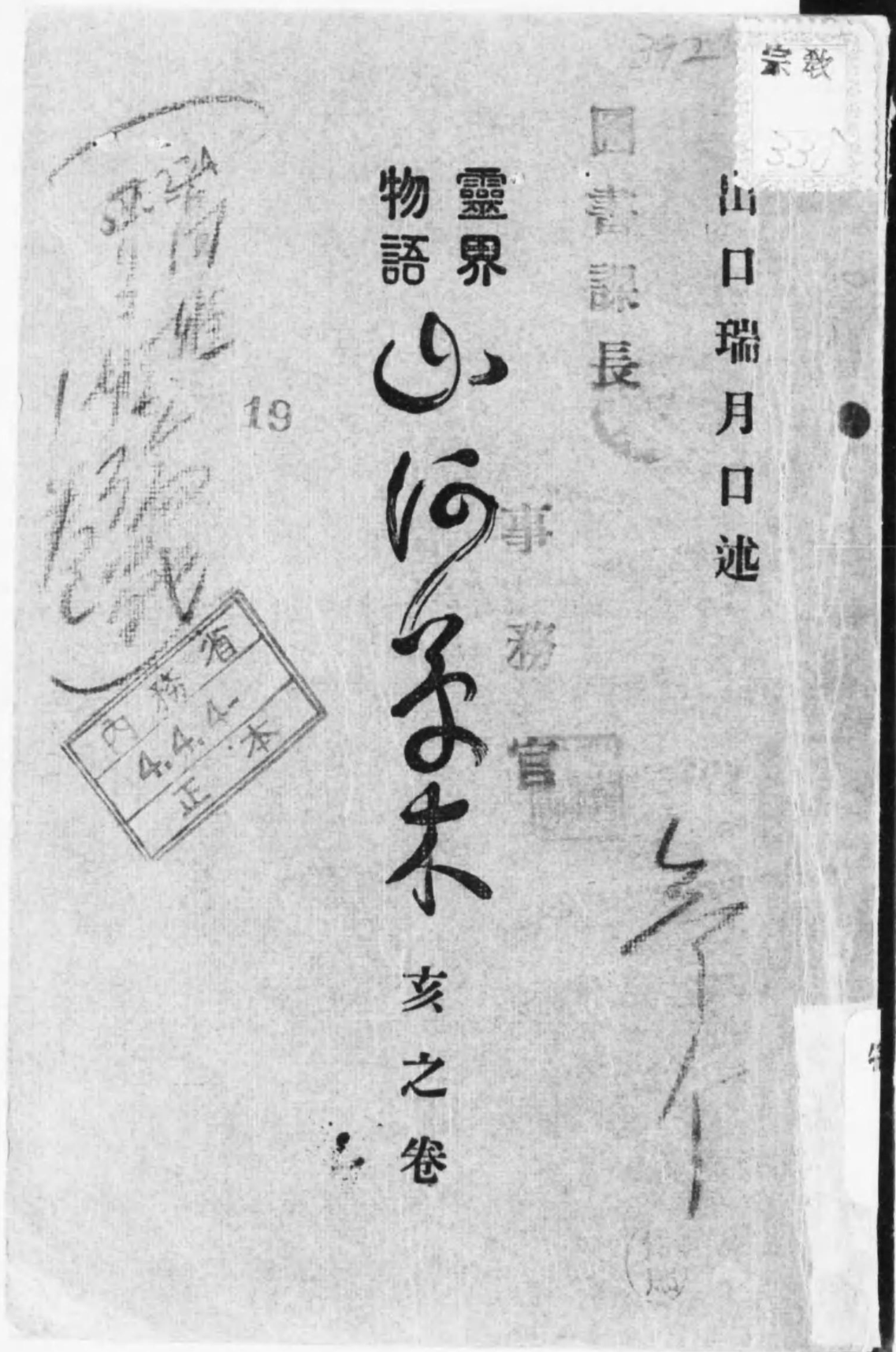


始

函 宗教
號 338
永久保存

特501
249

出口瑞月口述

山河草木

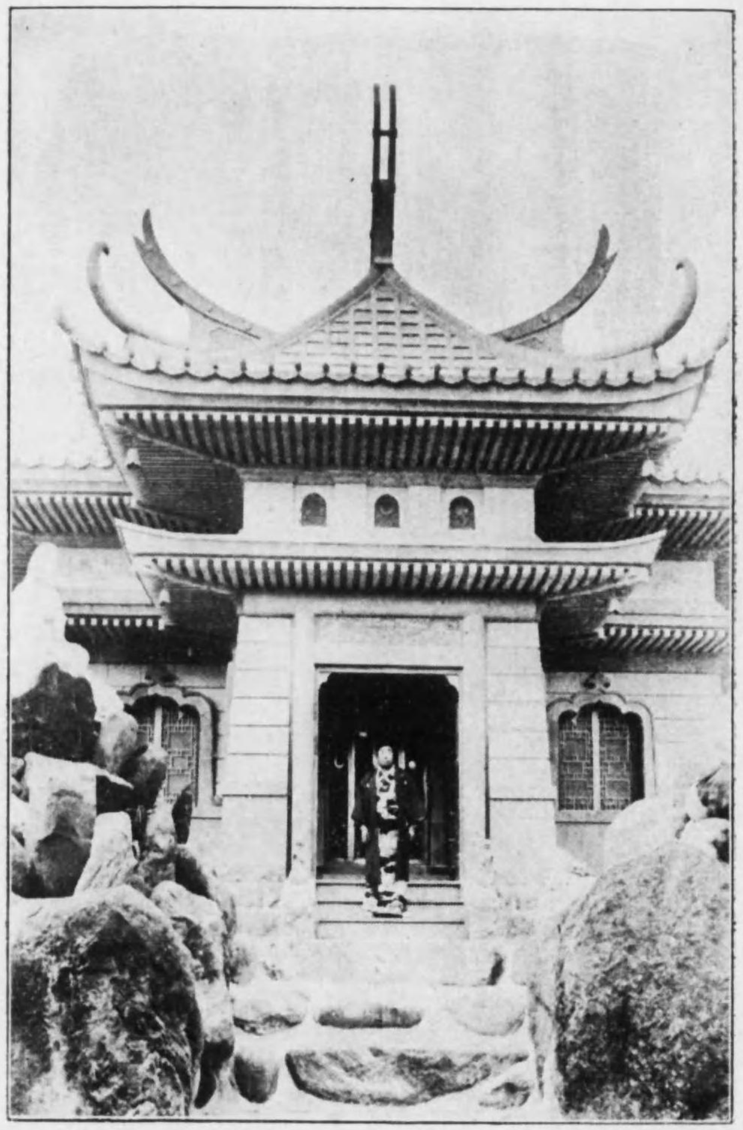
亥之卷

（霊界物語第七十二巻）

天聲社發行

国立国会
51.12.16
図書館書庫

1094697



龜岡天恩郷月宮殿前の出口聖師

序文

本年二月の節分祭の前日第七十三卷一册を口述せしより、今日まで靈界物語の口述を中止して居りました。何分天恩郷の經營や裁判事件の精神鑑定等にて心身を勞し、其上一月以來天恩郷に於て樂燒を始めたり、花壇を造つたり、愛善會、宗教聯合會等の事業のため豫定の物語を著はす事が出來なかつたのです。今回幸に舞鶴分所長、新舞鶴支部長、役員信者の御盡力に依り、天橋に淸遊する事となつたのを幸ひ、閑暇を利用して六月廿九日より今日まで三日間を費やし、原稿用紙一千二百六十餘枚を加藤明子、北村隆光二氏の丹精にて書上げる事を得ました。

惟神　かみの力に助けられ神書著はしぬ天のはし立

大正十五年七月一日　於小天橋掬翠莊　出口瑞月

編者序言　本卷は編輯の都合に依り、山河草木亥の卷（第七十二卷）として出版する事になりました。

山河草木【亥の卷】(72)

目次

序文……頁
總説……一

第一篇　水波洋妖

第一章　老の高砂……三
第二章　時化の湖……一六
第三章　嚴の欺乃……三一
第四章　銀杏姫……四八
第五章　蛸船……六六
第六章　夜鷹姫……八三

第七章　鰹の網引……九八

第二篇　杢迂拙婦

第八章　街宣……一一五
第九章　欠戀坊……一二九
第一〇章　清の歌……一四四
第一一章　問答所……一六〇
第一二章　懺悔の生活……一七五
第一三章　捨臺演……一九〇
第一四章　新宅入……二〇五
第一五章　災會……二一九
第一六章　東西奔走……二三四

第三篇　轉化退閉

第一七章　六樫問答……二五一
第一八章　法城渡……二七四
第一九章　舊場皈……二九五
第二〇章　九官鳥……三一〇
第二一章　大會合……三二三
第二二章　妖魅歸……三三八

山河草木【亥の巻】〔72〕

口述者　出口瑞月

筆録者　北村隆光
　　加藤明子

總説

本巻は千草の高姫、妖幻坊の杢助、天然坊のキューバー、玄真坊、ヨリコ姫、花香姫メリヤ姫、須賀の長者アリス、イルクを始め、神谷村の玉清別、コオロ、コブライ、フクエ、岸子、久助を始め、三五教の宣傳使照國別、照公別、梅公別の大々的活動舞台を

描寫し、須賀の宮に關する經緯等全紙面に活躍して居ります。殊に高姫、ヨリコ姫の問答の場面や、梅公別、ヨリコ姫の最後に於ける高姫との掛合は抱腹絶倒せん許りの面白味があります。

大正十五年七月一日　天之橋立なかや旅舘　於掬翠莊

出口瑞月識

第一篇　水波洋妖

第一章　老の高砂（一八一〇）

神の力のこもりたる
心の綱を奪はれて
世界隈なく駈けめぐり
よるべ渚の捨小舟
辨天さんの床下の
目標となして爪先の
斷念したる玉探し
所在をさがす折もあれ

如意の寶珠に村肝の
自轉倒島を初めとし
揚句のはては外國魂の
琵琶の湖水に浮びたる
三角石を暗の夜の
血のにじむ迄掻きまはし
產みおとしたる一人子の
淡路の洲本の東助は

昔なじみの戀人と
全身くまなく包まれて
綾の聖地を追放され
山の麓に建てられし
司となりて暫くは
仕へ侍りし折もあれ
若葉のめぐむ春となり
戀の焔を消しかねて
見なれぬ山野を數越えて
旅の疲れも漸くに

知るや忽ち戀雲に
又も狂態演出し
おためごかしに再度の
生田の森の神館
いとまめやかに大神に
夜寒の冬も早やあけて
再び起る婆勇み
大海原を打渡り
五月六月草枕
甦生りたる齋苑館

ウブスナ山にかけ上り
司に面會せんものと
泣きつ口説きつ詰寄れど
鐵石心の東助を
耻を忍びてテク〳〵と
にらみつけたる齋苑館
肩肱怒らせ尻を振り
思ひこんだる女丈夫の
岩に矢の立つ例あり
挺子でも棒でも動かない

總務を勤むる東別
富樓那の辯の舌の先
ビクとも動かぬ千引岩
生捕る由もないじやくり
阿修羅の姿凄じく
後足あげて砂をけり
己見てゐよ東助よ
矢竹の心は此通り
千引の岩にも松茂る
戀の意地をば立てぬいて

居並ぶ數多の役員に
風吹き荒ぶ阪道を
尻切れ草履を足にかけ
眼を怒らせ空中を
地團駄踏んで上り行く
御憲幸ひましまして
遂げさせ玉へと祈りつゝ
思ひがけなき神の宮
莊嚴無比の神德に
しばし佇み居たりしが

泡を吹かせにやおかないと
德利コブラをぶらつかせ
鼻息荒く口ゆがめ
二つの肩にしやくりつゝ
あゝ惟神々々
思ひつめたる戀の意地
祠の森に來て見れば
千木高知りて聳り立つ
呆れて高姫言葉なく
ヤンチヤ婆の高姫は

金毛九尾と還元し
大手をふりつゝ進みより
祠の森に仕へてゆ
齋苑の館の御使と
高姫こゝに尻を据ゑ
信徒等を引止めて
墮落させんと企みつ
奥殿深く鎭まりぬ
訪ふ眞人のメモアルは
聞いて高姫膝を打ち

圖々しくも受付に
嚴かに掛合へば
まだ日も經たぬ神司
信じて奥へ通しける
齋苑の館へ往來する
虱殺しに我道へ
教主の席にすましこみ
少時あつて受付に
トの字のついた司ぞと
ウブスナ山の聖場に

於いてトの字のつく人は
人目の關を耻らいて
心はさうぢやない(内)證の
けはしき阪を昇降し
暮うてムつたに違ひない
女の髪の毛一筋で
諺さへも有るものを
人に勝れた此體
全身つゝむ芳香を
慕うて來たるやもめ鳥

東助さんに違ひない
我身を素氣なく扱ひつ
妻に會はんと河鹿山
昔馴みの高姫を
あゝ有難い〳〵
大象さへも引くと云ふ
年はとつても肉付の
吾肉体の曲線美
忘られ難く捨て難く
東助さんも戀の道

少しは話せる人だなア
人目少なき此館
昔の缺点をさらけ出し
とは云ふものゝ妾だとて
着せられや顔が赤くなる
互に親切盡し合ひ
小鳥は歌ひ蝶は舞ふ
羽を擴げて翔つ如く
齋苑の館に鼻あかし
道を再開せんものと

こりや面白い〳〵
思ふ存分口説き立て
顔を紅葉に染めてやらう
年はとつても戀衣
赤き誠の心もて
老木の枝も花盛り
喜樂蜻蛉の悠々と
天下に羽翼を伸ばしつゝ
若しあはよくばウラナイの
雄猛ぴするぞ凄じき

受付イルの案内で　入り來る男はあら不思議
東助ならぬ時置師　いつも吾身の邪魔ひろぐ
李助總務の姿には　流石の高姫ギョッとして
倒れんばかりに驚けど　副守の加勢に勵まされ
膝立て直し襟正し　太いお尻をチント据ゑ
團栗眼を細くして　あらん限りの媚呈し
前歯の抜けた口許を　無理にすぼめたスタイルは
棚の鼠の餅かじる　その口許にさも似たり
高姫心に思ふやう　吾目の敵李助も
木石ならぬ肉の宮　少しは情は知るであらう

一程二金三器量　戀の規則と聞くからは
天下に比類なき程の　よき高姫がこの笑凹
鬼でも蛇でも吸ひ込んで　捕虜にせられぬ筈はない
そうぢや〳〵と胸の裡　合點々々〳〵と首肯いて
『これ〳〵もうし時置師　李助司の總務さん
ようマアお出まし下さつた　三羽烏の一人と
名を轟かすお前こそ　東別に比ぶれば
幾層倍の英傑ぞ　何しに御座つたその譯を
つぶさに知らして下され』と　しなだれかゝる嫌らしさ
李助總務に變裝した　大雲山の大妖魅

妖幻坊は面を上げ　鼻動めかし鷹揚に
赤き口をば開きつゝ　ダミ聲絞りケラ〳〵と
舘も揺ぐ高笑ひ

『これ〳〵高ちやん生宮さん　日出神の肉の宮
お前の強い戀の意地　側に見る目も羨ましと
後を慕うて來たわいな　東助さんには濟まないが
人の前とは云ひ乍ら　一旦捨てた戀の花
拾うて見るも人助け　戀の奥の手と勇み立ち
一つ相談せんものと　きつい山阪乘り越えて
出て來た可愛い男ぞや』と　祠の森の聖場で

交渉談判開始して
『二世や三世はまだ愚か　五百生迄契をば
こゝで確り結び昆布　寢てはするめの老夫婦
二人の譽も高砂や　お前の持つた浦舟に
眞帆や片帆をかゝげつゝ　浪の淡路の島影に
漂ひ舟を割りし如　玉の御舟を漕ぎ出して
心も安く住の江の　月と花との夫婦仲
面白可笑しく暮さうか』　云へば高姫喉鳴らし
好い鴨鳥を捉へた　チン〳〵カモ〳〵酒祝ひ
李助さんの銚子から　さす玉の露ドッサリと

玉の盃に満たしつゝ
契りも深き秋茄子
かゝる處へ宣傳使
高姫さんの醜態を
駒を停めて稍暫し
拂はんものとスマートに
忍ばせおきて妖幻坊
高天の原に救はんと
とゞまり玉ふ折もあれ
高姫引連れ雲霞
夜舟遊びをせんものと
種なし話に夜を明かす
初稚姫が現はれて
見て見ぬふりをなし乍ら
祠の森の曲津見を
旨を含ませ床下に
高姫司を神の在す
心も千々に碎かせつ
妖幻坊は逸早く
何處とちなく逃げ失せぬ

あゝ惟神々々
醜の高姫行衛をば
神の出口の瑞月が
風光明媚老松の
天の橋立背に負ひ
口述臺の舟に乗り
妖幻坊や高姫の
その經緯を詳細に
あゝ惟神々々

（大正一五・五・二〇　新六・二九　於天之橋立掬翠莊　北村隆光録）

神の恵みに照らされて
完全に詳細に明し行く
日本三景の一と聞く
白砂の濱にそゝり建つ
なかや旅宿の別館に
心も清くいさぎよく
戀と慾とに迷ひたる
傳へ行くこそ床しけれ
御靈幸ひましませよ。

第二章　時化の湖（一八一一）

妖幻坊の杢助や　金毛九尾の高姫は
初稚姫の神徳と　猛犬スマートの威に怖れ
祠の森を逸早く　雲を霞と逃げ出し
薄の茂る大野原　彼方此方とかけ廻り
迂路つき魔誤つき齒噛みつき　意茶つき喧嘩も病つきで
施す術も月の空　遙にかゞやく小北山
其靈場に蠑螈別　魔我彦司の居ると聞き
齋苑の館の總務職　笠にきながら妖幻坊

ウラナイ教の大教祖　高姫司と名乗りつゝ
二人は手に手を把りながら　一本橋をたわづかせ
河鹿の流を打渡り　魔風繼風吹き荒ぶ
蠑螈館に來て見れば　目界の見えぬ文助が
白き衣を着けながら　受付席に控へ居る
高姫見るより驚いて
『これ／＼お前は文助か　此聖場は高姫の
教を傳ふる蠑螈別　神の司の館ぞや
蠑螈の別の教の祖　高姫司をさしおいて
教を布くとは虫がよい　些つと心得なさりませ

此御方は産土の
大宮社太知りて
神の教に仕へます
李助總務で御座るぞや
いと叮嚀におもてなし
大法螺吹き立て尻を振り
お千代やお菊に揶揄はれ
木葉役員初、徳を
神の館を奪はんと
頂上の宮の鳴動に

山の臺に千木高く
鎭まり居ます素盞嗚の
三羽烏の御一人
早く挨拶した上で
神の如くに敬へ』と
松姫館に駈け込んで
腹は立てども虫耐へ
旨く抱き込み小北山
あらゆる手段を盡す折
・荒膽つぶし逃げ出し

二百の階段驀地
思はず知らず衝突し
高姫、初、徳諸共に
怪しの森の近く迄
我懐に隱したる
顏青ざめて思案顏
萎れかゝりし其風情
樣子を問へば妖幻坊
曲輪の玉をはしなくも
初、徳兩人我命を

下る折しも文助に
曲輪の玉を遺失して
雲を霞と逃げ出し
逃げ來る折しも妖幻坊
曲輪の玉の影なきに
芝生の上にぢつと坐し
見るより高姫怪しみて
如意の寶珠に勝りたる
小北の山に落したり
奉じて小北の山に行き

曲輪の玉を奪り返し
尻を痛めた兩人は
文助司を氣絶させ
再び怪しの森影に
高姫二人は喜びて
其懐に捻ぢ込みぬ
是幸ひと兩人は
頭の邊を目がけつゝ
夜目の見える妖幻坊
雲を霞と逃げ出し

歸り來れと命ずれば
チガ／＼坂をよぢ登り
漸く曲輪の玉を奪り
走り歸れば妖幻坊
やにわに玉を引奪り
折柄下る闇の幕
闇に潜める初、德の
闇に打ち出す石礫
金毛九尾の二人連れ
浮木の森の狸穴に

暫く身をば潜めつゝ
一夜に造る城廓は
金毛九尾の高姫は
本助司の妙術を
高宮彦は妖幻坊
高子宮子の侍女を
戀に狂へる折もあれ
初稚姫に踏み込まれ
妖幻坊は座に堪へず
もはや運命月の國

曲輪の玉を應用し
天を摩しつゝ聳立つ
實の城と思ひ詰め
口を極めて稱讃し
己は高宮姫となり
狸と知らず侍らせて
三五教の宣傳使
妖術こゝに暴露して
高姫司を引つ抱へ
デカタン國の高原の

空翔けり行く折もあれ
耐りかねてか高姫を
空中滑走の曲藝を
高姫息は絶えにけり
我肉体の失せしをば
八衢街道をとぼ〳〵と
杢助司の所在をば
月日も照らぬ岩山の
往來の精靈引つ捕へ
日の出の神の生宮を
俄に吹き來る烈風に
かゝへし腕くつろげば
演じて地上に墜落し
さは然りながら高姫は
夢にも知らず幽界の
彼方此方に彷徨ひつ
探し求めて三年振
麓に荒屋構へつゝ
底つ岩根の大ミロク
悟れよ知れよ救世主

此處に居ますと法螺を吹き
三年を過ぎし曉に
千草の姫の身死りし
再び現世に蘇生り
國王迄も尻に敷き
日夜演ずる折もあれ
梅公司に謀られて
金毛九尾と還元し
雲を霞と逃げ出し
探る折しも入江港
騒ぎ廻るぞ可笑しけれ
トルマン國の王妃なる
其肉体を宿となし
千草の高姫となりすまし
あらん限りの狂態を
言靈別の化身なる
包むに由なく忽ちに
トルマン城を後にして
妖僧キユーバの行衛をば
濱屋旅館の一室で

思はず知らず杢助に
出會し茲に兩人は
濱邊に出でゝ乘合の
スガの港をさして行く
いと面白き物語
あゝ惟神々々

○

曲津の運命月の國
八岐大蛇の片腕と
三五教の皇神の
化けおほせたる妖幻坊に
手に手を把つて夜の道
高砂丸に身を任せ
波瀾重疊限りなき
完全に委曲に述べて行く
恩賴をたまへかし

大雲山に蟠まる
世に聞えたる妖幻坊
清き明るき大道の
光を怖れ戰きて
神の大路を破らんと
三五教に捨てられて
腸探り杢助と
身を粉にしても碎けても
道こそ強き梓弓
再び會ひし高姫と
名に負ふ船に身を任せ
浪も靜な海原を
スガの港をさして行く。

數多の魔神を呼集へ
心を碎き身を焦し
心ひがめる高姫の
身をやつしたる恐ろしさ
潰さにやおかぬ三五の
ハルの海原船出して
教のとも船高砂の
油を流せし如くなる
鼻歌謠ひ勇みつゝ

妖幻坊、高姫の乗り込んだ高砂丸は餘程の老朽船であつた。此船には建造以來、高砂笑と云つて一種の妙な習慣が殘つて居た。高砂丸に乗り込んだ者は、大は政治の善惡より下は小役人の行動を初め、主人や下僕、朋友知己、其外所有人物を捉へて忌憚なく批評し、惡罵し、嘲笑することが不文律として許されて居た。遲々として進まぬ船の脚、退屈まぎれに種々の面白き話の花が咲いて來た。

船客の一人、

甲　『オイ、コブライ、玄眞坊と云ふ賣僧坊主は本當に仕方のない餓鬼坊主ぢやないか。天帝の化身だの、天來の救世主だのと大法螺を吹きやがつて、オーラ山に立て籠り、三五教の梅公別樣に内兜を見透され、岩窟退治をせられてお拂ひ箱となり、三百人の小泥棒を從へて再びオーラ山の二の舞をやらうと企み、スガの港のダリヤ姫に懸想して旨く肱鐵砲を亂射され、終の果てにやタラハン城の左守の神に腹迄切らせ、しこたま黄金を强奪り俺達に揚壺を喰はし、入江港の濱屋旅館に泊り込み、千草の高姫とか云ふ妖女に涎を垂らかし、眉毛をよまれ睾丸を締られ、所持金をすつかり奪られて、殺されよつたと云ふ事だが、本當によい氣味ぢやないか。俺達が越後獅子に化けて、彼奴の面を曝してやつた時の狼狽やうつたら無かつたぢやないか、本當に思うても溜飲が下るやうぢやのう、エヘヘヘ』

コブライ　『玄眞坊なんか惡いと云つたつて知れたもんだよ、彼奴は女さへ當がつておけば如何でもなる代物だ。些つと山氣はあるが、根が愚物だから、あんな奴は驚くに足らないが、この頃三五教の宣傳使の話に聞けば、大雲山の妖幻坊とか云ふ獅子と虎との混血兒なる大妖魅が天下を横行し萬民を苦しめ、三五教の聖地迄も横領せん

として、第一靈國の天人の御化身初稚姫樣とやら云ふエンゼル樣に太く誡められ、高姫とか云ふ淫亂婆と手に手を把つてハルの湖を渡ると云ふぢやないか。三五教の照國別とか云ふ生神樣のお話だと云うて今朝も埠頭に澤山の人が居てこそ〳〵話して居たよ。俺達は玄眞坊さへもあの通りこつぴどくやつゝけて肝玉を轉倒してやつたのだから、萬一妖幻坊に出會したら最後素首を捻切つて引千斷つて、小供が人形を潰した樣な目に會してやり、天下萬民の憂を除き救世主にでもなつてやらうと思ひ、もしや此高砂丸に怪しい奴が乘つて居やしないかと目をぎよろつかせて居るのだが、ねつから惡魔らしい奴も見えず、いさゝか見當違ひで面喰つて居るのだ。もしひよつと船底にでも潜伏して居やうものなら、俺が口笛を吹くから、お前も加勢を賴むよ。名譽は山別けだからのう、オホン！

コオロ　『ヘン偉さうに法螺を吹くなよ、內辨慶の外すぼり奴が、貴樣の面で妖魅退治も糞もあつたものか、天に口あり壁にも耳だ。妖幻坊と云ふ奴は魔神の大將だから、俺達の囁き話を千里外からでも聞いて居ると云ふ事だ。口は禍の門と云ふから、先づ沈默したら宜からうぞ』

コブライ　『馬鹿を云ふな、妖幻坊が怖くて此世の中に居れるかい。何程强いと云つても女の顏を見れや蒹葭のやうになる代物だから、知れたもんだよ。見ると聞くとは大違ひと云ふ諺もあるから、實物に遇うたら案外しやつちも無い者かも知れないよ　アハ、、、』

妖幻坊、千草の高姫は船の底に靑くなつて縮こまり、二人の話を聞いて腹は立つて堪らねど、何と云うても湖の上、水には弱い兩人の事とて悔し涙を呑み乍ら、素知らぬ顏

して控へて居た。頃しも晴れ渡りたる東北の空に一塊の黒雲現はれると見る間に、忽ち東西南北に擴大し、滿天墨を流したる如く、晝尙ほ暗く、暴風吹き來り、雨沛然として降り注ぎ、波浪は山岳の如く猛り狂ひ、半ば荒廢に歸したる高砂丸は、めき〳〵と怪しき音を立て、忽ち轉覆の厄に遇ひ、乘客一同は浮きつ沈みつ聲を限りに助けを呼んだ。折から激浪怒濤を犯して八挺櫓を漕ぎながら勢よく進み來る新造船があつた。嗚呼船客一同の運命は如何なるであらうか。

（大正一五・五・二〇　新六・二九　於天之橋立なかや旅館　加藤明子錄）

第三章　嚴の欸乃（一八一二）

豐榮昇る旭影　嚴の光も照國別の
司の一行朝まだき　眼を醒し風ぎ渡る
清けきハルの湖の岸　入江の港を舟出して
珍の教も照公や　一度に開く梅公別
玄眞坊と諸共に　名さへ芽出度き常磐丸
松の教の一行は　艪櫂を操り悠々と
ハルの港を辷り行く　魚鱗の波を湛へたる
ハルの海原影淸く　彼方此方にアンボイナ

信天翁や鷗鳥
飛び交ふ樣の美はしさ
照國別は立ち上り
天津日影を伏し拜み
聲朗かに太祝詞
唱ふる聲は海若を
驚かしつゝ船端に
波の鼓を打ちそへて
神國來を叫びつゝ
進み行くこそ勇ましき。
照國別『神代の昔天敎の
山に現れます元津神
木花姫の神勅もて
嚴の御靈や瑞御靈
敎を四方に開かんと
數多のエンゼル任け玉ひ
白雲棚引く其極み
青雲殿居向伏せる
極みも知らず皇神の
尊き敎を傳へ行く

その御諭に從ひて
瑞の御靈の神柱
千座の置戸を負ひ乍ら
御髮は風に梳り
食物着物乏しくて
やけるが如き夏の日も
世人の惱みを救はんと
ウブスナ山の聖場に
曲の靈魂に犯されし
眞人と生れ代らしめ
齋苑の館に現れませる
神素盞嗚の大神は
雨に體はそぼち濡れ
手足は霜にやけたゞれ
身をきる寒き冬の夜も
撓まず屈せず道のため
いそしみ玉ふぞ尊げれ
齋苑の館を建て玉ひ
人の心を清めつゝ
罪科深き吾々に

世立替

水波洋妖

名さへ目出度き宣傳使
浮瀬に落ちて苦める
ハルナの都に蟠まる
神の御國を永久に
四方に遣はす神司
高天原より降ります
我等の身魂に下しまし
あゝ惟神　々々
仕遂げおほせし曉は
ウブスナ山の聖場に
稱號さへも賜りて
世の諸人を救ふべく
曲津の神を言向けて
建てんと圖り玉ひつゝ
青雲高し久方の
天人天女の精靈を
守らせ玉ふぞ有難き
神の任さしのメッセージ
再び齋苑の神館
復命なして大神の

いと美しき尊顏を
かゝらせ玉ふ曉を
踏みて行く身ぞ樂しけれ
御守り厚く坐せば
如何で恐れん敷島の
たとへ天地は覆るとも
如何で撓まん眞心の
ハルの海原渡り行く
あゝ惟神　々々
神の惠ぞ畏けれ」

拜し奉りて玉の聲
待つも嬉しき神の道
吾行く道は皇神の
如何なる枉の襲うとも
神國魂の丈夫は
月落ち星は沈むとも
心搖がぬ梓弓
我一行に幸あれや
神の惠ぞ畏けれ

公『照國別の師の君の
神の御稜威も照公別
ウブスナ山を立ちしより
あらゆる惱みを凌ぎつゝ
言向和し諸人の
此處迄來りし宣傳の
此處は名に負ふハルの湖
眞帆を孕ませ進み行く
あまねく世人を天國に
あらゆる罪や穢をば
御名の一字を賜りて
名を負ふ吾ぞ尊けれ
吾師の君と諸共に
彼方此方の曲神を
艱難を救ひ恙なく
旅の空こそ樂しけれ
波こまやかに風清く
常磐の丸は神の船
導き渡す神の船
乘せて千里の海原に

彷徨ひ失ふ神の船
波よ立て〳〵風も吹け
我乘る舟は逸早く
あゝ惟神々々
世の人々の夢にだに
伏しては地に幸祈り
民安かれと祈りつゝ
木々の梢を屋根として
幾夜の野邊の假枕
あゝ惟神々〳〵
あゝ勇ましや〳〵
一瀉千里の勢で
スガの港へ走れかし
神の教の旅立ちは
知らぬ樂しき節ぞある
天を仰いで國々の
草の褥に石枕
月照る空を眺めつゝ
實にも樂しき旅出かな
御靈幸ひ坐せよ』

梅　公『吾師の君に從ひて
任さしのまに〳〵齋苑館
吾一行は恙なく
祠の森や小北山
テームス峠を打渡り
月の光も黄金の
沼に輝く清照の
右と左に別ちつゝ
神の惠みに救ひつゝ
漸く此處に來りけり
神素盞嗚の大神の
後に眺めて出でゝ行く
河鹿の難所を乘り越えて
浮木の森には目も吳れず
葵の沼に辿り着き
姫の命の宣傳使
姫の命と袂をば
トルマン國の危急をば
吾師の君に再會し
あゝ惟神々〳〵
神の惠ぞ畏けれ
玄眞坊は歌ふ。

玄眞坊『オーラの山に立籠り
敢行したる吾こそは
たとへ方なき人非人
オーラの山を根據とし
謀主と仰ぎオーラ山
梢に仕掛けた星下し
善男善女を迷はして
七千餘國の月の國
惡逆無道の企みをば
八岐大蛇の片腕か
ヨリコの姫を唆かし
泥棒頭のシーゴーを
高く聳ゆる大杉の
良家の婦女を拐かし
金穀物品奪ひとり
横領せんと企める
神の惠ぞ畏けれ』

時しもあれや三五の
梅公別に踏み込まれ
よるべなく〳〵三百の
ハルの湖原打渡り
様子を聞けば左守なる
十年の昔追放され
隠して再擧を圖るてふ
天帝の化身と化け込んで
吾が夜の伽にせんものと
かけて　み込む山の奥

教の道の神司
吾計畫も畫餅となり
不良分子を選抜し
タラハン城に忍び込み
智勇兼備のシャカンナは
山林深く姿をば
噂を聞いて雀躍し
夢寐にも忘れぬダリヤをば
色と慾との二道を
タニグク山の岩窟に

小盗人共に導かれ
命と頼むダリヤ姫
忽ち水沫と消えしより
二百の手下を借り受けて
神谷村の村長の
その暁の嬉しさは
天に叢雲花に風
握むに由なき水の月
暗路を辿り進み行く
峠の岩に腰かけて

一夜を明かす折もあれ
吾が酔ふ隙を窺ひて
シャカンナも糞もあるものか
ダリヤの行衛を探しつゝ
家に潜むをつきとめし
天にも上る心地しぬ
吹く世の中は是非もなし
心殘して澁々に
上れば高きタラハンの
前方遥かに見渡せば

野中に建てる城廓は　我の住居に適へりと
雄猛びし乍ら小泥坊　二人と共に進み行く
道の行く手もいろ〳〵に　戀路の雲に包まれつ
果し終せぬ果無さに　心を苛ちてタラハンの
城下に忍び待つ程に　タラハン城下の大火災
天の時こそ到れりと　タラハン城に乗り込んで
寶の倉に忍び入り　軍用金をせしめんと
逸る折しも捕へられ　一度獄に繫がれて
少時憂目は見たれども　泥坊頭のシヤカンナが
左守の神となりすまし　國政を握ると聞くよりも

惡口憎言並べ立て　遂には左守に腹切らせ
黃金數萬貢がせて　踏みも習はぬ谷川に
沿へる細路走る折　追手に追はれ是非もなく
運命を天に任しつゝ　ザンブとばかり谷川に
身を躍らして飛び込めば　人事不省となり果てゝ
忽ち幽界の旅枕　百の責苦に遇ひ乍ら
人の情に救けられ　再び惡を企みつ
入江の濱屋に泊り込み　ホロ醉ひ機嫌の折もあれ
花に嘯つく絶世の　美人千草の高姫が
色香に迷ひ涎くり　巾着迄も締められて

所持金スッカリ奪ひ取られ　命危くなりし折
照國別の師の君に　ヤット救はれ今此處に
法の友船常磐丸　松の心に立直し
心に匂ふ梅公別　日も麗かに照公の
神の司と諸共に　涼しき風を浴び乍ら
縮緬皺の漂へる　大湖原を進み行く
吾身の幸ぞ樂しけれ　朝日は照るこも曇るこも
月は盈つこも虧くるこも　假令天地は覆るこも
神に誓ひし眞心は　幾千代かけても違ふまじ
松のミロクの末迄も　守らせ玉へ惟神

神の御前に謹みて　吾身の行末祈ぎ奉る」

照國別「梓弓ハルの湖原乗り行けば
百鳥千鳥大空に飛ぶ。
天國の春にも擬ふハルの湖
乘り行く吾の幸多きかな」

照公別「大空に日は麗かに照公の
湖路靜に進む樂しさ。
風清く波穏かに吾が乘れる
船端波の皷打ち行く」

梅公別「御教の一度に開く梅の花

三千世界に匂ふなるらん。
梅薫る春の景色に醉ひ乍ら
ハルの湖渡り行くかな」

玄眞坊『吾が爲せし昔の枉を思ひ出でゝ
神の御船もいとゞ苦しき。
今よりは誠の神の大道に
進み行かなん假令死すとも』

斯く各自に歌を詠み乍ら波靜かなるハルの湖面を進み行く。時しもあれや、一天俄に搔き曇り、暴風吹き荒び、激浪怒濤は山岳の如く押し寄せ來り、常磐丸は木の葉の風に散る如く實に危き光景となつた。彼方の海面を遠く見渡せばハルの湖面にて名も高き高砂丸の船体は木葉微塵に打碎け、乘客の一同は激浪怒濤に翻弄され、命限りに救ひを叫ぶ聲、恰も叫喚地獄の狀態を現出したるが如くであつた。照國別は吾身の危難を忘れ高砂丸の遭難を救はんと船頭を勵まし八艇艫を漕ぎ乍ら、高砂丸の難船場目蒐けて力限りに漕ぎつける。あゝ惟神　靈幸倍坐世。

（大正一五・五・二〇　新六・二九　於天之橋立なかや別館　北村隆光錄）

第四章　銀杏姫（一八一三）

李助に化けた妖幻坊及び千草の高姫は高砂丸の破壊沈没に命許りは助からんものと、兩人共手早く着衣を脱ぎすて、眞裸体となつて海中に飛び込んだ際、妖幻坊は全く元の正体を現はし獅子と虎との混血兒たる怖ろしき姿となつて了つた。高姫も眞裸体となつて毛だらけの妖幻坊の首に喰ひつき、浪のまゝに漂ひ乍ら老木茂れる一つの離れ島に漂着した。

高姫はホット一息し乍ら、

高姫『アヽこれ李助さん、大變な暴風雨に遭ひ、妾はもう命が無くなるかと思つて居ましたのに、お前さんの變身の術で此の荒湖を乘切り、お蔭で命が助かりました。何ヒマア貴方は偉い隱し藝をもつて居らつしやるのですねえ』

妖幻坊は高姫に正体を見附けられ、大變に心を痛め、如何云ひ譯をして胡魔化さうかと思つて居た矢先、高姫の方から却つて感賞の言葉を受け、心の底から善意に解して居る事を悟つたので、わざと得意の面をしやくり乍ら、

妖幻坊『オイ、千草の高姫、俺の魔術は偉いもんだらうがな、まさかの時になれば獅子とも虎とも分らぬ斯ういふ怪体な形相に變化するのだもの、天下に怖れるもの一つも無しだ。俺も斯う云ふ美人を女房にして居る以上は、一つの不思議な妙術を使つてお前の信用を得ておかないと、何時東助の野郎に鞍替せらるゝか分らない危險區域に置かれて居るのだから、お前を助ける爲に斯う云ふ醜い肉体に變化して千草の高姫女帝に忠勤を勵んで見たのだよ、アハヽヽヽ』

高姫『アタ憎らしい李助さんだこと、二つ目には東別だの東助だのと、そんな舊めかしい話は止めて貰ひませうかい。東助なんて淡路の洲本で船頭稼ぎをやつて居つた、澁紙面をして色の黑い獨活の大木みたよな体見倒しですよ。何一つ雌れ業を知つて居ると云うでもなし、八島の別のお鬚の塵を拂ひ、お尻の臭を嗅いで喜んで居るやうな代物は、假令十千萬兩の金を積んで倒になつて歩いて見せても靡く千草の高姫ぢやありませんよ。東助なんて云ふのは勿体ない、彼奴は豆腐の助で結構だ。此高姫の指一本で、潰さうと破うと自由自在ですもの、オホ、、、』

妖幻坊『これ高ちやん、隨分法螺を吹くぢやないか、齋苑の舘で東助に肱鐵砲を打ち出され脆くも敗北し、泣く〳〵河鹿峠を渡つて祠の森に逃げ込み、世を果無むで燻ぼつて居たぢやないか、些つと頬桁が過ぎるぞや』

高姫『頬下駄を履くのは果助位が適當ですよ。いや朴下駄でも東助なら過ぎて居る、この千草の高姫はトルマン國の女帝だから、桐の下駄か伽羅の下駄が性に合つて居るんですよ。ヘン、朴下駄が過ぎるなんて餘り人を輕蔑して貰ひますまいかい』

妖幻坊『オイ〳〵高ちやん、さう履き違をして貰つては聊か迷惑だ。話が脱線して仕舞つたよ、ほうげたが過ぎると云つたのはお前の口が過ぎると云つたのだ』

高姫『ヘン、口が過ぎるなんて馬鹿にしなさんな、妾だつて口すぎ位は立派に致しますよ、男の一匹や二匹位遊ばして養つてやりますワ』

妖幻坊『アハ、、、、益々分らんぢやないか』

高姫『益々分らんの、別れんのと、それや何を云ふのですか、お前さんは此高姫に別れやうと思つていらつしやるのでせう。盛装を凝らし髪を立派に結つてお白粉でもつ

けて居た姿を見て、お前さんは閻惚をやつて居たのだらう。斯う難船して保護色の衣類は浪に攫はれ、髪はサンバラに亂れ、要塞地帶が丸出しになつた姿を見て愛想が盡きたのでせう。ヘン、これでも、

（都々逸）　お前嫌でも又好く人が
　　無けれや妾の身が立たん

と云ふ俗謠の通り男のすたり物はあつても女のすたり物は三千世界何處を探しても滅多に有りませんぞや。ヘン、嫌なら嫌ときつぱりと言つて下さい、此方にも考へがありますからな』

妖幻坊『ア、益々困つた事を云うぢやないか、ハハー分つた！　讀めた！　この杢助が妖術を使ひ過ぎ、斯んな姿に化けた姿が女帝のお目に留り、秋風が吹いたのだな、よし、それならそれで此方にも考へる餘地は十分にある筈だ』

高姫『又しても、お前さんは妾を術無がらすのかいなア、エ、腹の惡い人だこと、そしてあの曲輪の玉は如何なさいましたか。よもや湖に落しはなされますまいなア』

妖幻坊『ウン、それや心配すな、湖に飛び込む際腹の中へ呑み込んでおいたから大丈夫だ』

高姫『マア〳〵呑み込んだのですか、ヘーン、何故妾に呑まして下さらないの、本當に貴方は水臭いお方だワ』

妖幻坊『お前に呑ましたいは山々だが、咄嗟の場合、そんな餘裕があつて堪らうかい、失禮乍ら杢助の高天原にちやんと納めておいたから、何時か又吐き出す時があるであらう、さう心配はするに及ばないよ』

高姫『成程、抜目のない杢助さんだこと、それでこそ高姫が最愛の夫、末代迄の旦那様だワ。併し杢助さん、此島に着くは着いたが、斯う裸では道中も出來ないし、曲輪の法でも使つて立派な着物を一枚拵へて下さる譯には行きますまいかなア。貴方だつてさう毛だらけの變化姿では人中へも出られますまい』

妖幻坊『成程、お前の云う通りだ、俺の聞く通りだ。雨蛙が木に止まつて鳴く通りだ、書き出しは右の通りだ。俺も此通りだ、兩手を土について正に高姫の君に謝り參らする通りだ。アハ、、、』

高姫『これ杢ちやん、笑うて居る場合ぢやありませんよ。何程春ぢやと云つても斯う寒くつては、やりきれないぢやありませんか、何とか工夫が御座いますまいかなア』

妖幻坊『ヤア、此處に船が一艘繋いである。これから考へると、誰か此島に上陸して居る人間がある筈だ。一つ其奴の皮を剝いて、お前と俺とが身に纏ふ事とせうでは無いか』

高姫『全然り追剝のやうな事をするんですか、それでは時置師の宣傳使とは言はれますまい。妾だつて何程寒くつても泥棒した衣類を身に纏ふ事は嫌です。そんな事をすれや日出神の神格が薩張地に落ちて仕舞ひますワ』

妖幻坊『てもさても馬鹿正直な女帝様だなア。昔から譬にも背に腹は替へられんと云ふぢやないか、大善をなさんとすれば、小惡は時と場合により止むを得ないだらうよア、寒い〳〵、斯う俄に強い風が吹いて來ては、俺も耐らない。何處かに好い竹藪でもあれば、すつこんで風を避けたいものだ』

と云ひ乍ら、「高姫續け」と一聲殘し、篠竹のショボ〳〵と生えて居る竹藪の中に身を

隱して仕舞つた。其實漸くに顏だけ人間らしく化て居るもの、、身に一片の布片も纏つて居ないので苦しくつて耐らず、顏までが元の妖怪に還元しさうなので、そんなエグイ面を見せては、道の高姫も愛想をつかすだらうと思ひ、この竹藪に飛び込み第二の變化術を施す爲めであつた。此藪は百坪許りの面積があつて、其中へ入るや否や忽ち白胡麻のやうな蟻の群が數知れず登りつき、如何なる人間と雖も身体中を嚙み破り、忽ち身体は腫上り痛痒うて耐らない。そうこうして居る中に、足の一尺もある怪しい蜘蛛が幾萬ともなくやつて來て尻から粘着性の強い糸を出し、身体をぎり〳〵卷にして仕舞うと云ふ怖ろしい魔の森である。それとも知らず妖幻坊が飛び込んだのだから耐らない。荒くたい毛の間に幾万とも知れない蟻が嚙みつく痛さ、道の妖幻坊も悲鳴をあげて虎の唸るやうな呻吟聲で高姫の救ひを求めて居る。高姫は其聲を聞きつけて藪の傍に立ち寄り中を覗いて見れば、妖幻坊は蟻に責められ七轉八倒の苦しみの道最中であつた。高姫は氣も轉倒せん許り打ち驚き乍ら竹藪の後の方に廻つて見ると、一寸小高い塚が在つて、其上に周圍三丈もある大銀杏が天を摩して立つて居る。銀杏の根本には小さい祠が立つて居て、若い男女が何事か歎きしながら祈つて居た。扨け目のない高姫は、早くも男女二人の着衣を失敬して東助の難を救ひ自分も着用せんものと、銀杏の木の後に隱れて兩人の話を聞いて居た。

女『もしフクエさん、どう致しませう。何程貴方と妾と繼におちて惱んで居ましても强慾な繼母が、貴方との戀を許して呉れないんですもの。スガの港の呉服屋へ嫁に行けと、煙管で疊を叩いての日夜の折檻、生の兩親は既にこの世を去り、繼母の手に育てられた妾、その恩義を思へばこうして戀しい貴方と、天下晴れて添ふ事が出

來ませう。又妾の家はスガの吳服屋さんに大變な借金があり、それを返さなけれやなりませず、返す金はなし、母も大變に心配致して居ります。若し妾の緣談を斷りでもせうものなら、戀しきスガの里に住む事は出來ません。だと云つて貴方を思ひ切る事は如何しても出來ません、何とか此の銀杏の神樣の御利益によつて圓滿な解決をつけて貰ひたいもので御座います』

と又もや歎く。

フクエ『オイ岸子、さう悲觀したものぢやない。此神樣は女神樣だと云ふ事だから、きつとお前に同情して下さるに相違ない。私ぢやとて未だ主人持の身の上、どうする事も出來ぬみじめな有樣だが、お前と別れる位なら、一層ハルの湖へ身を投げて死んだが增しだよ』

岸子『此神樣に一切の衣服をお供へすれば屹度願を叶へて下さると云ふぢやありませんか、上衣だけなりとお供へして歸りませうか』

フクエ『成程上衣の一枚位お供へしたつて別に苦しくはない』

斯く話す折しも、銀杏の木蔭より、優〳〵き女の聲、

女『妾こそは、銀杏姫の命で御座るぞや、今より千五百年の昔、戀男に逢はん爲め盟の船に乘つて、この離れ島に夜な〳〵通ひ、折柄の暴風雨に遇ひ、惜しき命を湖の藻屑となし、其精靈凝つて茲に裸姫となり、名も銀杏ケ姫の命と改め、衣類一切を我に献ずるものには、如何なる戀も叶へ得させん緣結びの守護神であるぞや。そち達兩人の戀はこの千草オットドッコイ銀杏姫の命が請合うて叶へてやらう程に、衣類一切を此處に脱ぎ捨て、其上この魔の藪に飛び込んで、惱める一つの生物を眞

裸の儘救ひ出せよ。さすれば其方の願望は必ず〳〵今日只今より叶へて遣すぞや、夢々疑ふ勿れ、夢々疑ふ勿れ』

と云ふ聲は千草の高姫である。二人の男女は實の神の言葉と信じ、兩人一度に借氣もなく、下着迄殘らず脱ぎ捨て銀杏姫の命に奉り、神勅の如く魔の藪に飛び込んで、白蟻に惱み苦しめる妖幻坊をやつとの事で引き出して仕舞つた。不思議にも白蟻は藪の外一歩出づるや否や、一匹も殘らず、身体より落ちて藪中に逸早く姿を隱して仕舞つた。二人の男女は甘々と高姫の計略にかゝり眞裸にせられ、其上妖幻坊を救ふべく藪中に飛び込んだ爲、身体一面白蟻に集られ身動きならず、七轉八倒の苦しみをして居る。

高姫『ホヽヽヽヽ、オイそこな若い二人の呆け共、こなさんは銀杏姫の命でも何でもないんだよ。よつく耳を浚へて聞いておきや、ウラナイ教の大教主千草の高姫さんだよ。二人が眞裸で白蟻に嚙み殺されるのも前世の因縁だ。その代り潔く蟻共に喰つて貰つて死になさい、乾度最與第一の天國に此の贋の銀杏姫に衣類を献じた徳によつて救ひ上げてやらん事もないぞや、……これ杢ちやん、何を呆けて居るのぢや確りなさらんかいな』

妖幻坊『ヤア高姫、よう助けて呉れた。思はず知らず魔の森に飛び込んで一つよりない命を棒に振る處だつた。お前の縱横無盡の智略によつて此の杢助も一命が助かつたやうなものだ。いや感謝するよ』

高姫『ホヽヽヽヽ、これ杢ちやん、曲輪の玉の神力は如何なつたのですか、まさか白蟻の奴に奪られたんぢやありますまいなア。神變不思議の妙術を使ふお前さんが、蟻なんかにしてやられるとは、些つと均衡が取れんぢやありませんか』

妖幻坊『甘いものには蟻が集る、辛い奴には蟻が集らんと云うぢやないか。兎に角俺は人間としては最上等だ、そうして女に甘いだらう。血液も人一倍甘いなり、何分身魂が勝れて良いものだから蟻の奴、有難がつて吸いついたら離れんのだよ。お前だつて俺に吸ひついたら容易に放して吳れまいがな』

高姫『成程道理を聞けば御尤も千萬、迂つかり杢ちやんは、これから蟻の居る所へは行つて貰はないやうにせねばなりませんワ。妾だつてきつと蟻につかれる體に違ひありませんからなア』

妖幻坊『それやさうかも知れん、いつも喋々喃々と甘い囁きを聞かして吳れるからなアー。併し俺を救けて吳れた二人の男女は可愛さうだから助けてやらうぢやないか。何と云うても俺の命の親だからのう』

高姫『杢ちやん、それや何を云ふんですか、お前さんの正体を見附けられた以上、こんな者を置いては後日の妨になるぢやありませんか。あの通り蟻に喰はしておけば別に人殺の罪にもならず、蟻は喜んで腹を膨らすなり、蟻の爲めには我々は救世主ですよ。蟻だつて人間だつて同じ事ですよ、たつた人間二人の命の代りに數百万の蟻の命を救へば、幾何功德になるか知れませんよ。そんな宋襄の仁はおよしなさい。折角喜んで居た蟻が困りますよ。サアー二人の衣類も胡魔化して剝いたから貴方は男の方をお着けなさい。妾は嫌だけれど阿魔女の方を暫時着てやりますワ、何と智慧程世に尊いものがあらうか、杢助さん、千草の高姫の器量はちと分りましたか』

妖幻坊『烏賊にも、蟹にも蛸にも足は四人前だ、ヤア感心々々、お前の腕前には時置師

の杢助も恐れ入谷の鬼子母神だ。呆れ蛙の面に水だ、ウフ、、、」

フクエ『もし〳〵私を助けて下さいな、餘り殺生ぢや御座いませんか』

高姫腮をしやくり乍ら、

高姫『ヘン頓馬野郎奴、それや何を云ふのだ。最前あれだけ叮嚀に引導を渡して置いたぢやないか、マア悠りと其處に兩人が寢て喰れて居たらよからう、有難うと感謝しなさい、お前の體は忽ち蟻ケ塔になるぞや。朝から晩迄働いても〳〵喰へぬ世の中に寢とつて喰れるとは幸福な人間だ、オホ、、、」

と憎らしげに腮を突き出し、尻を三つ四つ叩いて一目散に杢助と共に船着場に馳せ歸り、二人の繋いでおいた小船に身を任せ、浪なぎ渡る春の湖面を鼻歌謠ひ乍ら甘き囁きをつゞけて何處ともなく漕いで行く。

（大正一五・五・二〇　新六・二九　於天之橋立なかや旅館　加藤明子錄）

瑞月

仁愛神世に顯はれて天地も
安く治まる貴の足御代
御代安く生代足代と治りて
仁慈の雨は四方を潤ほす

第五章　蛸船（一八一四）

高砂丸の沈没を見てその危難を救ふべく、照國別一行の乘れる常磐丸は現場に馳せつけ、救ひの綱を投げかけて一人も殘らず吾船に救ひあげて了つた。一同の乘客は九死に一生を得て照國別を神の如く感謝し尊敬し、喜びの聲は狹き船中に湧く如くであつた。

さしも烈しかりし暴風はピタリと止んで海面俄に凪ぎ渡り、恰も疊の上を辷る如き光景となつて來た。救はれた人々の中には一旦玄眞坊と事を共にせし泥坊の小頭分コブライ、コオロの兩人があつた。コブライ、コオロの兩人は自分を救うて呉れた船の中に泰然と坐つてゐる玄眞坊の姿を見て、船の片隅に頭を鳩め囁き初めた。

コブライ『オイ、コオロ、どうやら宣傳使の側に神さん然と口をへの字に曲げて坐り込んでゐる男は玄眞坊ぢやなからうかのう』

コオロ『俺も最前から、よう似た奴だと思つて考へてゐるんだが、何分尊い宣傳使の側に虱の卵見たいに、しがみついて離れんものだから「オイ、どうだ」と聲をかける譯にも行かず、俺の僻目ぢやなからうか、若しも人違ひではないかと控へてゐたが、どうもよく似てゐるやうだ。縱から見ても横から見ても、何處から觀察しても熟視しても、調査しても、正眞正銘の玄眞坊とより思はれないぢやないか。ここで一つ、歌でもよんで、彼奴を此處へつり出す工夫をしやうぢやないか』

コブライ『一旦は俺等に辛い目を見せよつた敵だと云つても俺の命を助けてくれた仲間だから、あつて過ぎた事はモウ忘れやうぢやないか。過越苦勞は禁物だと三五教でも教へてるからのう』

コオロ　『何、彼奴が玄眞坊とすれや、舊惡の露顯を恐れて俺達を助けるもんかい。キット俺等ア水を呑んで誰に助けて貰つたか夢幻で分らなかつたが、彼奴に助けて貰つた氣づかひは毛頭なからうよ。もし玄眞坊が俺等と見たならば、助けるふりして水の中へ投り込んだに違いない。兎に角、俺等二人は玄眞坊にとつては、非常の邪魔物で目の上の瘤だからのう』

コブライ　『如何にも、そらさうだ。彼奴に助けて貰つたのでないとすれや、何も、憚る事はない。ここで一つ彼奴の舊惡を歌つて宣傳使さんに訴へやうぢやないか』

コオロ　『そんなら俺か一口云ふから、あと又お前か一口歌へ、俺か一口お前か一口、交り代りに歌ひさへすれや片見怨みがなくて可いだらう。サア初めるぞ』

と云ひ乍ら、少しばかり立膝をして、玄眞坊の面を睨みつけ乍ら歌ひ初めた。

コブライ　『ここは名に負ふハルの海』

コオロ　『ヨーイ〳〵ヨイトサ〳〵』

コブライ　『往來の船も澤山に　竿舵干さず續いてる』

コオロ　『ヨーイ〳〵ヨイトサ〳〵』

コブライ　『高砂丸に乘り込んで　ドテライ時化に出會し
船は忽ち轉覆し　水に流されブク〳〵と
已に土左衛門となりかけた』

コオロ　『ヨーイ〳〵ヨイトサ〳〵』

コブライ　『オイ、後はお前の番だ、俺か囃役だ』

コオロ　『ヨシ〳〵之からが正念場だ、シツカリ、囃せよ。

天道は人を殺さない　救ひの船が現はれて
一人も殘らず常磐丸　助けて下さつた有難さ』

コプライ『ヨーイ〳〵ヨイトサ〳〵』

コオロ『中に一つの不思議さは　人並勝れた大男
天下無双の貴婦人と　海に飛び込み忽ちに
虎か獅子かと云ふやうな　怪体な姿を現はして
荒波かき別けブク〳〵と　逃げて行つたのが面白い
此奴ア又さうした者だらう　狐狸の化けたのと
一緒に船に乘りしため　彼のやうな時化に會うたのか』

コプライ『ヨーイ〳〵ヨイトサ〳〵』

コオロ『それは如何でもよいとして　肝腎要の生命をば
助けて貰うた嬉しさに　感謝の歌を歌ひませう
三五教の宣傳使　照國別とか云ふお方
我身の危難を顧みず　伊猛り狂ふ荒波を
物ともせずに乘りきつて　危き人の生命を
守らせ玉ふは生神か　但しは神の御化身か
お禮は言葉に盡されぬ　幾重も感謝し奉る』

コプライ『ヨイ〳〵ヨイトサ〳〵』

コオロ『それに一つの不思議さは　オーラの山に立籠り
世人を欺く星下し　怪体な藝當演じたる

贋天帝の贋化身
玄眞坊のデレ助が
こんな汚れた身魂奴が
又もや龍神腹立て、
舟を覆すに違ひない
惡魔の權化の玄眞坊
谷蟆山に迷ひ込み
手ごめにせんと息捲きつ
性懲りもなく附け狙ふ
恥を知らない賣僧坊主

天下唯一の贋救主
すました顏して乘つてゐる
ハルの湖原渡りなば
荒風起し浪立て、
思へば〳〵恐しや
オーラの山を失敗つて
スガの港のダリヤ姫
きつい肱鐵喰はされて
蛙の面に水とやら
タラハン城へと乘り込んで

左守の神に駄々をこね
しこたま金を奪ひとり
深谷川に身を沈め
やつて來よつた曲者よ
我々二人を誑かし
うつゝを扳かし巾着を
その糞坊主が泰然と
横柄面を下げよつて』

コブライ『ヨイ〳〵ヨイトサ〳〵』

コオロ『すましてけつかる憎らしさ　これ〳〵もうし宣傳使

無理難題を吹きかけて
追手に追はれてドンブリと
一度は幽冥旅行まで
又もや娑婆に舞ひ戻り
千草の姫とか云ふ奴に
しめて殺されたりと聞く
常磐の丸に坐り込み

怪体な奴が居りまする
女と見たら娘でも
目尻を下げて涎くり
彼奴が船に居る限り
懷中用心なさいませ
仲間に這入つた事あれど
決して後へは戻らない
蓑笠つけて居りまする
お經を讀んで世を渡る
決して心配要りませぬ』

其奴は油斷がなりませぬ
人の女房でも構はない
物に致さなおかぬ奴
此船中の御一同
私も一度は泥坊の
改心致した其上は
これ〳〵この通り修驗者
人の門戸に立ち乍ら
改心組の我々は

コブライ『ヨイ〳〵ヨイトサ〳〵』
コオロ『彼處にけつかる糞坊主
人をたばかる大泥坊
命助けて貰ひました
ありし昔の惡行を
謹み訴へ奉る
コブライ、コオロの申す事
お禮に氣をつけおきまする
御靈幸ひましませよ』

天帝の化身と化け込んで
重ねて懷中物御用心
お禮に宣傳使に玄亘坊
根から葉から曝け出し
天地の神も御照覽
決して僞りありませぬ
あゝ惟神々々

コブライ『ヨイ〳〵ヨイトサ〳〵』

玄眞坊はたまりかねてや、ッカ〳〵と座を立つて二人の側に寄り添ひ、言葉も低う叮嚀に、

玄眞坊『ヤア、コオロさんに、コブライさん、先づ〳〵御壯健でお目出度う。イヤモウ、キッウ膏を皆さんの前でとられました。もう此邊でどうか御勘辨を願い度いものですな』

コブライ『ヘン……これ位で御勘辨が願い度いものですな……ソラ、ナーン吐かしてけつかる。これや貴樣、俺をえらい目に遭はした事は覺えて居るだらうな。サア之から貴樣の生首を引つこ抜いてチット不恰好だけど、煙草入の根付にしてやるから、因果腰を定めて居れ。のうコオロ、さうでもせんと、腹の虫が承知せんぢやないか』

コオロ『ウンそらさうだとも、こんな奴を助けてたまるものか。此奴の所在をどこ迄も探し出して、怨みをはらさにやおかぬと、修驗者と迄なり下つて居つたのだもの、今日會つたのは優曇華の花咲く春に會つたやうなものだ。サア玄眞坊、返答はド、ド、どうだい』

と握り拳で胸を三つ四つ打ち乍ら雄猛びする其の可笑しさ。螻蛄が井戸の底から放うり上げられて、踊つて居るやうなスタイルである。

玄眞坊『ヤア本當に惡かつた、濟まなかつた。然し乍ら之も因緣づくぢやと見直し、聞直し、何卒俺の罪を許してくれ。俺もな、スッカリ改心して三五教の宣傳使のお弟子となつたのだから、俺に指一本觸えてもヤッパリ宣傳使樣に御無禮した事になるのだからのう』

コブライ『ヘン、虎の威をかる野良狐奴が、うまく、ぬけやうとしても、玩具の脇差

だ、ぬきさしならないぞ。サア之から荒料理だ。オイ、コオロ、此船中の無聊を慰むるために、チット古いけれど、蛸一匹料理して、皆さんにお目にかけやうぢやないか』

コオロ『航路の安全を祈るため龍神さんにこの蛸を料理して、お供へするのも信心の一つだ。又あんな時化がくると叶はないからのう、イッヒ、、、小氣味のい、事だワイ』

玄眞坊『オイ、コブライ、コオロの兩人、本眞劍に俺を料理するつもりか、エー、それなら、それで、此方にも一つの覺悟がある。無抵抗主義の三五教に入信した俺だけど正當防衛は許されてあるから、小泥棒の一匹や二匹ばらす位、何の手間隙要るものか。サア見事相手になるならなつて見よ』

と、團栗眼をむき出し仁王立ちになつて船底に四股を踏み鳴らしてゐる。コオロ、コブライの兩人は、

兩人『何、猪口才な、賣僧坊主』

と云ふより早く、一人は首つ玉に喰ひつき、一人は足を引攫へ、せまい船の中で轉けつ輾びつ一場の活劇を演じ出した。

照國別は此体を見るより、

照國別『爭ひは枉津の神の仕業ぞや
　　靜かなるこそ神の御心。
　憎まれて憎み返すは枉神の
　　醜の業なり畏れつゝしめ。

よき事と惡しき事柄行き交ひて
此世の中は開け行くなり』

コオロ、コブライの二人は此歌を聞くより、バット手を放せば玄眞坊は鼻汁をすゝり乍らヤットの事で起き上り、

玄眞坊『有難し照國別の師の君の
生言靈に命拾ひぬ。
コブライやコオロの君に毆られて
罪消えなんと思へば嬉し』

コオロ『我命助け玉ひし師の君の
嚴言靈に反くよしなし』

コブライ『憎い奴とは思へども宣傳使
待てとの聲に力抜けたり』

照國別『爭ひの雲も漸く晴れ行きて
誠のかゞみ照るぞ目出度き』

照公別『不思議なる神の助けに會ひ乍ら
尙も爭ふ人心かな』

梅公別『たゞ人の心は廣く押し並べて
今目の前に三人の姿。
晴れて又曇る五月の大空に
さも似たるかな人の心は』

梅公別は照國別に少時の暇を乞ひ、救ふべき人ありと言擧げし乍ら濱邊の町に舟を横たへ、一先づ上陸し、更に小舟を借り受け湖中に浮ぶ太魔の島を指して艪を操り乍ら別れ行く。

常磐丸は順風に帆を上げ乍らスガの港を指して進み行く。

（大正一五・五・二〇　新六・二九・於天之橋立なかや別舘　北村隆光錄）

第六章　夜鷹姫（一八一五）

妖幻坊、高姫の二人は太魔の島に繋いであつた小船を失敬し、四五町許り湖上を進んだ折しも、矢を射る如く一艘の小船此方を指して馳せ來るに出會した。高姫は目敏くも其船を見てハッと胸を轟かせながら顏色を紅に染めた。妖幻坊は此體を見るより稍不審を懷き、

妖幻坊『改めて千草の高姫樣、いや女帝樣、凄い御腕前にはこの杢助、驚愕否感激仕りました。歸命頂禮謹請再拜謹請再拜』

高姫『これはしたり、杢助樣、妙な事を仰しやいますね、何をそれ程感激なさつたのですか。他人行儀に改まつて謹請再拜だなんて、よい加減に揶揄つておいて下さい

な』

妖幻坊『忍ぶれど色に出にけり我戀は
　　物や思うと人の問ふ迄
と云ふ百人一首の歌をお前知つて居るだらう』

高姫『へン、馬鹿にして下さいますな、そんな歌位よう知つて居ますよ、それが一体何だと仰有るのです、怪体の事を云うぢやありませんか』

妖幻坊『お前は今彼處へやつて來た一艘の船の若者を見て、顔を紅葉に染めたぢやないか、お前の寢ても醒めても忘れる事の出來ない戀人に相違あるまいがな、さうだから凄いお腕前だと云つたのだ』

高姫『何の事かと思へば又嫉いて居るんですか、水の上で妬くのも餘り氣が利かんぢやありませんか。サ、そんな氣の利かん事を云はないで艪を操つて下さいな』

妖幻坊『艪を操るよりも實はあの男の艶福家にあやかり度いのだ。トルマン城の王妃の君、千草の高姫さんに思はれた天下唯一の美男子だからなア。俺のやうな虎とも獅子とも譯の分らん毛の深い男と一緒に暮すよりも、縮緬のやうな肌をした若い男と同棲した方が、どの位世の中が樂しいか分らないからのう。いや醜男には生れて來たくないものだ』

高姫『それや何を仰有います、よい加減に妾を虐めて置いて下さいませ』

妖幻坊『本當にお前はあの男を知らんと云ふのか』

高姫『絶對に知らない事は知らないと云ふり外に道はありませんもの』

妖幻坊『日出神の生宮、底つ岩根の大ミロク樣の身魂は、決して嘘は云はないでせうね』

高姫『勿論の事です』

妖幻坊『そんなら此處で一つお前と約束しやう、お前が知つて居るか居ないか、あの船を追つかけてあの若者に會はして見やう。もし、向の方からお前の顏を見て何とか言つたら決して知らんとは言はさないからな、關係のない男女には言葉を交さないのがこの國の規則だ。又只一度でも關係したら、內證でも言葉をかけなければならぬ規則だから、どうだ高姫、知らんと云ふなら調べて見やうか』

高姫『なんとマア嫉妬心の深い執念深い人だこと、もうそんな事は水に流して一時も早うスガの港に行かうぢやありませんか』

妖幻坊『お前がさう云へば云ふ程私の疑が增して來る許りだ。若しお前に關係があつたとすれや如何して吳れる。サアそれから定めておこう』

高姫『さう疑はれちや行り切れませんから、貴方の御勝手に調べて下さい、さうしたら屹度疑が晴れるでせう。妾の身は晴天白日ですからなア』

妖幻坊『よし、おい出た。サアこれからが化の皮の現はれ時ぢや、高姫さん確りなさいませや』

高姫『何なと仰有いませ、その代りあの男と妾と關係が無かつたと云ふ事が分つたら、どうして吳れますか』

妖幻坊『ハヽヽ如何するも斯うするもない、分つたらお前も疑が晴れて結構だらうし俺も嫉妬心がとれて大慶だ。萬々一俺の云ふ事が違つたら今後どんな事でもお前の云ふ事に絕對服從を誓つておく。しかし俺が勝つたらどんな事でもお前は俺の無理難題を聞くだらうなア』

高姫『あゝ、あもやの喧嘩で併論ですワ』

「よし面白い」と云ひ乍ら妖幻坊は船首を廻し一艘の船を目當に追かけて行く。一艘の船は自分の現在盗つて來た船の繋いであつた場所へと横づけとなつた。妖幻坊はオーイ〳〵と熊谷もどきに呼はり乍ら早くも岸邊についた。梅公別は二人の姿をつく〴〵眺めながら、

梅公別『ヤア、誰かと思へば千草の高姫さんで御座つたかゝ其後は打ち絶て御無沙汰致しました。貴女のお居間でグッスリと寢さして貰ひ、いかい失禮を致しましたが、ます〳〵お達者でお目出とう、見れば立派なお婿さんをお貰ひなさつたやうですね私とても萬更他人ではありますまい。併し女と云ふものはよう氣の變るものですね。どうか私の時のやうに、氣の變らないやうに、今度の婿さんを大切にして上げて下さいや。斯う云うても私は貴女に再緣を迫るやうな事もありませんから御安心下さいませや。そうしてお二人お揃ひで此島へ何の御用でお出ですか』

高姫『これは〳〵何處の方かは知りませんが、人違ひをなさるも程がある。成程妾は千草の高姫に間違はありませんが、廣い世界には同じ顏した女もあり、同じ名の女もあるでせう、そんな事を云うて貰うと夫ある妾、大變に迷惑致します』

梅公別『高姫さん呆惚けちやいけませんよ、人違ひするやうな老眼でもなし、晝夜問斷なく夢にまで貴女の姿を見て探して居る私、どうして間違へる氣遣ひがありませうか』

妖幻坊は面色朱を注ぎ身体一面、慄はせ乍ら高姫と梅公をグッと睨めつけ、

妖幻坊『これや、そこな青二才奴、誰に斷はつて俺の大切の女房と何々しやがつたか

サ、その理を聞かせ、返答次第によつては容赦は罷りならぬぞ。これや女帝、いや阿魔奴、夜鷹、辻君、惣嫁、十錢、下等内侍、蓆敷奴が、八尺の男子を今迄馬鹿にしよつたな、サアこの裁きを確りと付けて貰ひませうかい」

高姫「これ杢助さん、辻君だの、十錢だの、蓆敷だの、餘り情ないお言葉ぢやありませんか、妾こそ全く知らないんですもの、此人は妾の美貌を見て精神が錯亂したのでせう、さうでなければ見ず知らずの妾を見て、こんな事を云う道理がありませんもの」

妖幻坊「マアこの青二才はこの島に置いておきや逃げる氣遣ひはない、その代り此の借船は預つて置く」

と確りと自分の船尻に縛りつけ二三町計り沖へ漕ぎ出し、

妖幻坊「サア、夜鷹さん、斯うなつちや此方のものだ。本當の事を云うて貰ひませうかい」

高姫は進退これ谷まり隱すにも隱されず龍實取混ぜて覺束なくも白狀をする。

高姫「前齋苑の館の救世主、神素盞嗚尊の三羽烏の御一人、第一靈國の御天人樣、曲輪の術に妙を得たる天下無双の英雄豪傑、縱から見ても横から見ても、頭から見ても、尻から見ても、何處に一所穴のない吾夫樣、その御慧眼には道の千草の高姫も感嘆の舌を捲かざるを得ませんワ」

妖幻坊「何だ、長たらしい俺の名を並べやがつて機嫌を取らうと思つたつて、其手に乘るものか、善言美詞も時と場所によるぞ。阿婆摺れ阿魔奴、そんな追從は聞き度くない。貴樣の戀人に間違ひは無からうがな、女なら女らしくあつさりと白狀しろ」

高姫『エ、もう斯うなれや破れかぶれだ。サア私をどうなとして下さいませ、お前さんに捨てられちや、最早此世に生甲斐も有りませんから、覺悟を決めました。サア、早う殺しなさい』

と冀度胸を据ゑて、もたれかゝる。

妖幻坊『それ程殺して欲しけれや、敢て遠慮はしない覺悟だが、併しお前を殺すと忽ち困るのは俺だ。お前の美貌を種に一芝居打たにやならんからのう』

高姫『ホ、、、、それやさうでせうとうも、ねえ貴方、どうして此の可愛い女房に刃が當てられませう、そこが人情の美しいところ、見上げたるお志、益々好になつて來ましたワ』

妖幻坊『エ、馬鹿に晒すない、すべた阿女奴。それよりも約束を履行して何でも俺の云ふ事を聞いて貰はうかい』

高姫『ハイ何なりと聞きませう、お前さんが死ねと仰有つても嫌とは云ひません、（低い聲）ことはないけど、マア〳〵何でも聞きますから仰有つて下さい』

妖幻坊『そんなら俺に誠意を現はす爲め、あの男を甘くちよろまかして魔の森へ甘く放り込んでくれ。さうすれや彼奴は蟻や蜘蛛に命を奪られて仕舞ふから、俺もお前に尻を振られる心配もなし、夜の目も樂に寢られると云ふものだ。どうだ得心か……默つて返事をせんのは嫌と吐すのか』

高姫『イエ〳〵決して〳〵嫌とは申ません、夫の爲になる事なら、如何な事でも命を的に決行して御覽に入れませう、サア早く船をつけて下さい』

妖幻坊は「お手並拜見」と云ひ乍ら梅公別の上陸した地點に引き返し見れば、梅公は

二人の様子の唯ならぬに氣を揉み、萬々一大喧嘩でも湖上でおつ初めよつたら、忽ち湖中に飛び込み二人の危急を救はんと、じつと様子を見て居たのである。雲突く許りの妖幻坊は高姫と共に上陸し、

妖幻坊『其處に居る青二才奴、此方の云ふ事をよつく承はれ、我こそは齋苑の館の總務を勤むる時置師の杢助だ。其方は照國別のヘボ宣傳使の草履持を致す木葉野郎だらうがな。俺の女房と懇勲を通じたとか云ふ話だが、今日は大目に見ておくから、以後は必ず慎んだが宜からうぞ』

梅公別『ヤ、貴方が噂に高き時置師の神、杢助様で御座いましたか、存ぜぬ事とて偉い失禮を致しました。高姫さんと私との仲は双方共一度は戀慕致しましたが、未だ要領は得て居りません。それ故赤の他人も同様ですから、餘り貴方からお咎めを蒙る譯も御座いますまい』

妖幻坊『ハヽヽヽヽ、口は調法なもんだのう、ゴテ〳〵云ふにや及ばない、お前の良心に問うたら分るだろう。

人間はゞ鬼は居ぬとも答ふべし
心の間はゞ如何こたへん。

と云ふ道歌を知つて居るだらう、俺も男だ、敢て追及はしない。高が青二才の一匹や二匹つかまへてゴテ〳〵云ふのは時置師の估券にも關するから、寛大の處置を取つて不問に付しておく、有難う思へ』

高姫『もし梅公別様、時置師の神様はあゝ仰有つても決してお前さんを憎むやうな方ぢやないから悪く思はないやうにして下さい。併しあたいに戀慕したつて駄目ですか

ら其點は固く堅く注意しておきますよ。お前さんも宣傳使の卵ださうだから、一つ手柄初めにこの魔の森に落ち込んで苦しんで居る男女の命を救けておやりなさい。

さうすれや杢助さんの怒もとけ、お前さんの手柄も立つと云ふもの、どうです一つ俠氣を出して決行する氣はありませんかな」

梅公別は言靈別の化身で高姫や妖幻坊の正体を感知しない筈はない。そうして魔の森に高姫に誑かされ、二人の若き男女が蟻に責められ蜘蛛の糸にまかれ苦しんで居る事は既に已に常磐丸の船中に於て透視して居るのである。夫故に梅公別は兩人を救ふべく小舟を操つて一人此所に上陸したのである。梅公別は早速鎭魂の神業を魔の森に修し、強き神靈を送つて居たから蜘蛛も蟻も如何する事も出來ないのを知つて居た。それ故泰然自若として妖幻坊、高姫の船中の爭を見物して居たのである。今高姫が俠氣を出して二人の男女を救へと云つた心の奥底は、梅公別をあの蟻の魔の森に飛び込ましめ、喰ひ殺さしめんと企んで居る事もよく承知して居た。それ故梅公別は二つ返事で承諾し妖幻坊、高姫の目の前で泰然自若魔の森へ飛び込んで仕舞つた。妖幻坊、高姫は兩手を拍つて高笑ひ、竹藪の入口に進みよつて腮を突出し尻を叩き所在罵詈嘲笑を逞うし「ゆつくりお喰れなされ」と捨臺詞を殘し、再び船に身を任せ、何處ともなく浮び行く。梅公別は無事に二人を救ひ出し、暫し大銀杏の根下に腰打ちかけ、種々の成行き話を二人より聞き取り乍ら三人一つの小船に身を任せ、スガの港をさして進み行く、あゝ惟神靈幸倍坐世。

（大正一五・五・二〇　新六・二九　於天之橋立なかや旅館　加藤明子錄）

第七章　鰹土の網引（一八一六）

常磐丸の船中に於ける玄眞坊、コブライ、コオロの直接行動的爭ひも無事に濟んで船端に皷の波を打たせ乍ら水上靜かに辷り行く。

船中の無聊を慰むるため彼方此方に面白き國の俗謠が聞えて來た。中にも最も著しきは惠比須祭の歎乃である。船頭は舷頭に立ち乍ら海に馴れたる爽かな聲で節面白く唄ひ出した。

船　頭　『正月の一朔日二日の初夢に　如月山の楠の木を
　　舟に造り今おろす　白銀柱押し立て、
　　黄金の富を積ませつゝ　綾や錦を帆にかけて
　　寶の島へと乘り込んで　數多の寶を積み込んで
　　追手の風に任せつゝ　思ふ港へ馳せ込んで
　　これのお倉に納めおく　ヨーン、デー、ヤール
　　神の昔の二柱　金輪際より搖ぎ出でたる此島を
　　自轉倒島と云うとかや　山には常磐のいーろいろ
　　黄金白銀花咲いて　お山おろしが吹くとても
　　散らぬ盛りに國々は　浦々迄も豐かにて
　　五穀草木不足なく　七珍万寶倉に滿ち
　　とざさぬ御代の惠みより　長命無病と聞くからは
　　四方の國より船寄する　綾や錦の下着より

縞に木綿の紅までも　唐に大和を取りまぜて
商ふ店の賑やかさ　獵、漁りの里々は
山に雉鴨鶴もある　裏の港の磯つゞき
あけて惠比須の浪壺は　ヤンサ、目出度やお鉢水
ヨーン、デー、ヤール』

玄眞坊は此歌を聞いて飛び上り、自分も一つ負けん氣になり、貧弱な頭から、こぼれ出した欵乃は一寸變ちきちんなものである。

玄眞坊『春の海面よく光る　大島小島數々と
碁石のやうに並ぶ中　海賊船が右左
彼方此方と横行し　寶を積んだ船見れば

一目散にやつて來て　否應云はさずぼつたくり
ゴテ〳〵言へば命まで　貰つて歸る凄い船
こんな手合に出會つたら　ヨーン、デー、ヤール
金鎚さんの川流れ　一生頭が上るまい
俺も昔は山賊の　大頭目と手を組んで
オーラの山に天降り　杉の梢をからくりに
數多の火影を輝かし　天から星が下りまし
天帝の御化身救世主　玄眞如來の說法を
聽聞なさると觸れ込ませ　彼方此方の村々ゆ
善男善女を誑かし　もう一息と云ふ處へ

三五敎の梅公別
二人の女と諸共に
實にも甲斐なき蛸坊主
ヨウマア天地の神々は
生かしておいて下さつたと
ヨーン、デー、ヤール
よからぬ事のみ企みて
彼方此方に振り向いて
山の岩窟にダリヤ姫
藻脫けの殼の馬鹿らしさ
女房をつれて出で來り
蛸の揚げ壺喰はされた
今から思へば恐ろしや
この惡僧をいつ迄も
思へば冥加がつきるやうだ
彼方此方とさまよひつ
三百人の不良分子
自分は一人タニグクの
せしめんものと連れ込めば
それから愈やいとなり

神谷村の里庄なる
忍び込みたるダリヤをば
無理往生にせんものと
まだ〳〵惡い事許り
全身隈なく冷汗が
ヨーン、デー、ヤール
齋苑の館の神樣の
照國別の師の君に
心の底から立直し
ヨーン、デー、ヤール
玉淸別の館にと
奪ひ返して我妻に
思うた事も水の泡
やつて來た事思ひ出しや
夕立の如くに湧いて來る
今乘る船は常磐丸
御用を遊ばす宣傳使
危き所を助けられ
お伴に仕へ侍り行く
サア之からは〳〵

心の基礎をつき直し　神に及向ふ仇あれば
鬼でも蛇でも構はない　命を的に飛び込んで
今まで惡を盡したる　その補ひをせにやならぬ
あゝ面白や〳〵　面白狸の腹皷
打つ波の上をスク〳〵と　狸坊主の蛸坊主
人が笑はうが謗らうが　そんな事には構はない
これから世間に恥さらし　自分の罪の償ひを
天地の神にせにやならぬ　玄眞坊も之からは
三五教の宣傳使　神の司の僕とし
一生此世を送りませう　ダリヤの姫や其外の
美人の事は思ひきり　一生懸命に神様の
誠の道を傳へませう　ヨーン、デー、ヤール
あゝ惟神〳〵々々　神は我等と共にあり
人は神の子神の宮　神に任せし此体
虎狼も何かあらん　上下揃うて世を聞く
治る時をまつの世の　彌勒菩薩の再來と
仕へまつらん齋苑館　神素盞嗚の大神の
御前に誓ひ願ぎ奉る　御前に誓ひ願ぎ奉る
ヨーン、デー、ヤール』

常磐丸は漸くにして翌日の眞晝頃スガの港に安着した。この港には鰹の漁が盛にある

丁度常磐丸の着いた頃、網引きが初まつて居た。一行は旅の憂さを慰むるため漁師に頼んで引網の中に加はり、ともに面白可笑く歌を謠ふことゝなつた。

幾艘の船は網の周圍に集つて音頭をとり乍ら陸上に向つて網を引き上げる。親船が先づ歌の節々の初めを謠うと他の船の漁師達は之に和して後をつぎ、以て力の緩急を等しくする、その調子は丁度木遣節のやうである。

『せめて此子が男の子なら
　櫂を持たせて、
ホラ、ホーオ、サッサア　ヤッチンエエ
イヤンホ、サッサー　ヤッチンエエ。
スガは照る〳〵太魔の島曇る
　あいの高山雨が降る。
日高お岩は二つに割れて
　割れて世がよいヨヤハアサッサ。
引けよ若衆、きれいな加勢
　十二船魂勇ませて。
日那大黒内儀さん恵比須
　中の小供がお船魂。
船の艫艪へ鶯とめて
　明日は大漁と泣かせ度い。
船は新造でも艪は新木でも

船頭さんが無けれや走りやせぬ。

ホラ、ホーオ、サッサ　ヤッチンエエサッサ

ヤッチンエエ　ヨイヤハアサッサ。

照國別『これ照公さん、何と面白い網引ぢやないか、澤山の船頭衆が黒いお尻を出し、眞裸の眞跣で黒い鉢巻を横ンチョに絞めて大きな網を海上一面に張り廻し、言靈を一齊に揃へて鰹を上げる處は何とも云へぬ壯觀の感に打たれるぢやないか』

照公別『如何にも師の君の仰せの通り、壯絶快絶の極ですな。我々宣傳使も、あの引網に倣つて一遍に少くとも數万人の信者を引き寄せ、うまく宣傳をやつたら面白いでせうな。どうです先生、これからスガの町へ行つたら、大公會堂でも借り込んで數万の町民に一度に聽かせてやつたら、大神の神德に浴する信者が澤山に出來るかも知れません。勞少くして効多き、最も文明式の方法ぢやありますまいか』

照國別『イヤ〳〵さうではないよ、公會堂なんかは神の道の宣傳には絶對に適しない。公會堂は政治家や主義者の私淑する處だ、そんな處で神聖な神樣の教をした處で身魂に相應しないから、勞多くして効無しだ』

照公別『そんなら先生、劇場は如何でせうか』

照國別『尚々不可ない、劇場は遊覽客の集まる處だ。歌舞伎や淨瑠璃や浪花節、手品師活動寫眞等やる處で、假令聽衆が幾何やつて來ても、遊山氣分で出て來るからチッとも耳へ這入らない。却つて神の御名を傷つけるやうなものだ』

照公別『成程さう聞けば仕方がありませんな、そんなら學校の講堂は如何でせうか』

照國別『學校の講堂は學問の研究をする處だ、深遠微妙な形而上の眞理や信仰は、到底

學校の講堂で話した處で駄目だ。何人も研究心を基礎として聞くから、何人も眞の信仰には入れないよ。青年會館だの倶樂部だの公會堂だの、民衆の集まる處は凡て駄目だ。夜足で捕つた魚や、網で捕つた魚は、同じ魚でも味が惡い。一匹々々鈎の先に餌つけて釣り上げた魚は味が良い如く、神の道の宣傳は一人對一人が相應の理に適うとるのだ。止むを得ないなら五六人は仕方がないとしても、それが却つて駄目になる」

照公別「成程さうすると仲々宣傳と云ふものは、容易に擴まらないものですな」

照國別「一人の誠の信者を神の道に引き入れた者は神界に於てはヒマラヤ山を千里の遠方へ一人して運んで行つたよりも、功名として褒めらるゝのだからなァ」

照公別「さうすると先生は入信以來、どれ位誠の信者をお導きになりましたか」

照國別「殘念乍ら、未だ一人も誠の信者を、ようこしらへてゐないのだ」

照公別「へーエ、さうすると、梅公別や我々は宣傳使の試補となつて、廻つてゐますがまだ信者の數には入つては居ないのですか」

照國別「マアそんなものだな」

照公別「何と心細いものぢやありませんか」

照國別「さうだから心細いと何時も言ふのだ」

照公別「此玄眞坊さんはさうすると、未だ信者の門口にも行かないのでせうね」

照國別「ヤア此玄眞坊殿は隨分惡い事も行つて來たが、お前に比べては餘程信仰が進んで居るよ、已に天國へ一歩を踏入れて居る」

照公別「それや又どうした譯ですか。我々は未だ一度も太した嘘もつかず、泥棒もせず

嬶舎弟もやらず、正直一途に神のお道を歩んで來たちやありませんか。それに何ぞや大山子の張本、勿体なくも天帝の御名を騙る曲神の權化とも云ふべき行爲を敢てした玄眞坊殿が天國に足を踏込むとは一向に合點が行きません」

照國別「大なる惡事を爲したる者は悔い改むる心も亦深い。眞劍味がある。それ故身魂相應の理によつて直に掌をかへす如く地獄は化して天國となるのだ。沈香も焚かず屁も放らずと云ふ人間に限つて、自分は善人だ、決して惡い事はせないから天國に上れるだらう等と慢心して居ると、知らず識らずに魂か墮落して地獄に向ふものだ、惡い事をせないのは人間として當然の所業だ。人間は凡て天地經綸の主宰者だから此世に生れて來た以上は、何なりと天地の爲に神に代る丈けの御用を勤め上げねばならない責任をもつてゐるのだ。その責任を果す事の出來ない人間は、假令惡事をせなくとも、神の生宮として地上に產みおとされた職責が果されて居ない。それだから、身魂の故郷たる天國に歸ることが出來ないのだ」

照公別「天國に我魂在りと思ひしに
　地獄に向へる事の歎てさ
　今よりは心の駒を立直し
　神の任さしの神業勵まん」

玄眞坊「身は假令根底の國に沈むとも
　神の惠みは忘れざるらん」

照國別「千早振る神の惠みは世の人の
　夢にも知らぬ處にひそむ。

暗の夜を照り明さんと宣傳使
よさし玉ひぬ瑞の大神」

（大正一五・五・二〇　新六・二九　於天之橋立なかや別館　北村隆光録）

瑞月

千年の色香移らぬ常磐木の
心ありたし神の生宮

第二篇　杢迂拙婦

第八章　街

スガの港に名も高く
藥種問屋の主人のアリス
强慾非道のありたけを
絞らん許りの惡逆に
老若男女は聲々に
譏らぬ者こそなかりけり
積れば汚くなる譬へ
只では出さぬ强慾さ

宣（一八一七）

百万長者と聞えたる
金と血氣に任せつつ
盡して人の生血をば
遠き近きの隔てなく
鬼よ大蛇よ惡魔よと
金と塵とは澤山に
出すことなれば手も舌も
取込む事なら牛の骨

犬のそれでもかまやせん
積んで山なす塵の峰
終にはダリヤの行衛さへ
親子の情のいや深く
吐息つく〳〵病床に
二男のイルクは妹の
探ね廻りし折もあれ
三五教の神司
初めて神の道を聞き
一行と共に我家路

人の恨みの金ばかり
親爺の罪が子に報い
分らずなりて道にも
忘れ兼ねてか煩悶の
呻吟する身となりにけり
所在を求めて遠方近方と
船の中にて出會し
梅公別に助けられ
妹引きつれ宣傳使
いそ〳〵指して歸り來る

待ちに待ちたる父アリス
喜び勇み狂ひ立ち
知らず白髮の首ふりて
梅公別の懇篤な
鬼のアリスも改心し
捧げ奉りてスガ山の
天地の神の鎭座ます
今迄犯せし罪科の
所在世界の民草が
憂瀨に落ちて苦しめる

娘の無事を聞くよりも
手の舞ひ足の踏む處
悲喜交々の爲態
教の道の宣傳に
財産全部を大神に
老木茂れる聖場に
大宮柱太知りて
贖ひとなし一つには
惡魔の教に惑され
その慘狀を救はんと

決心したるぞ殊勝なれ　　梅公別は一夜の
假の宿りをなさんとて　　夕飯を終りし折もあれ
タラハン城の空高く　　雲を焦して燃え上る
大火の模様を見るよりも　　後をヨリコや花香姫
二人に任せおきながら　　栗毛の駒に鞍おいて
威風凛々大野原　　駒の嘶き鈴の音
ヒン／＼シヤン／＼ドウ／＼と　雲を霞と駈けて行く、
あゝ惟神　々々　　御靈幸倍ましませよ
神の教にヨリコ姫　　瑞の靈の花香る
月と花との二人連れ　　梅公別の旨を受け

スガの町々辻々を　　白妙の衣纏ひつつ
連錢葦毛の駒に乗り　　法螺貝吹き立て人集め
やさしき花の唇を　　靜に開き手をあげて
鞍上にすつくと立上り、　　老若男女の皆様よ
ヨリコ『スガの港に住みたまふ　　神素盞嗚の大神の
三千世界の救世主　　女ながらもお取次
瑞の靈の御教を　　心靜に聞し召せ
致しますれば村肝の　　元津祖なる生神が
抑も此世は天地の　　日月火水木金土
唯一柱坐し在して

森羅萬象創造し
同じ形に造りまし
各自に宿しまし
仕へしめんとなし給ふ
實にも尊きものですよ
此世に生れ來た上は
お金があれば酒飲んで
これより外に人生の
誤解して居る哀れさよ
盡しおへたと云ふならば

かつ人間を神樣と
嚴と瑞との精靈を
天と地との經綸に
人の體は斯の如
それをも知らず人間は
飲めよ歌へよ寢よ起きよ
歌舞音曲に戯れる
目的更にないものと
これで人生の本分が
人は獣類と同じこと

萬の物の靈長と
人は神の子神の宮
造らせ玉ひしものなれば
尊き務がなけれやならぬ
如何と云はゞ人間は
有らん限りの赤心を
天國淨土の圓滿を
魂をば研き開かせつ
八衢地獄の境遇より
常磐堅磐の花園に

どうして名附けられませうか
尊き神の宿として
衣食住居其外に
その又尊き神業は
天地の神の御爲に
盡し奉りて道の爲め
はからん爲めに靈魂の
此世に住める同胞を
救ひ出して天國の
導き渡す宣傳使

御伴に仕へ奉りつゝ
仕へ奉るぞ人として
あゝ惟神　々々
神が表に現はれて
此世を造りし神直日
唯何事も人の世は
世の過は宜り直せ
神の教の御言葉ぞ
諸ひ奉れよ惟神
一二三つ四つ五つ六つ
其神業の一端に
最大一の務なり
御霊幸倍ましませよ
善と惡とを立別ける
心も廣き大直日
直日に見直せ聞き直せ
これぞ全く三五の
敬ひ奉れ百の人
神の教に嘘は無い
七八九つ十百千

萬の國の民草を
神の教に導きて
盡さにやおかぬ神の御子
今迄犯せし罪科の
仕へん爲の宣傳歌
聞かせたまへよ人々よ
シヤンコ〳〵シヤン〳〵
馬の蹄も憂々と
隣の町を指して行く
梅の花香の宣傳使
一人も殘らず三五の
天地にかはる大業を
ヨリコの姫や花香姫
その嬢の一端に
心平らに安らかに
偏に祈りおきまする
シヤンコ〳〵シヤン〳〵
手綱引き締め鞭をあて
梅公別に救はれし
未だ稱號は無けれども

世人を導き救はんと
紅葉の照れる如くなり
馬上豊かにスガの町
美々しき宣傳服着けて
駒を留めて鞍上に
三十二相を具備したる
知らず識らずに町人は
生神様の御出現
二人の前に寄り集ひ
人山築きし勇ましさ

思ふ心は紅の
ヨリコの姉に従ひて
上から下迄和妙の
本町通りの十字街
スックと立ちしスタイルは
聖観音の生姿
両手を合せ伏し拜み
如來の來降と喜びて
蟻の這ひ出る隙もなく
花香は優しき聲を上げ

飽迄白き白魚の
『あゝ惟神　々々
誠の道を說き諭す
月は盈つとも虧るとも
山津は如何に荒ぶとも
あゝ惟神　々々
三五教の宣傳使
雲の如くに降りまし
いとも尊き福音を
曇りし靈も澄み渡り

優しき右手をさし上げて
神が表に現はれて
朝日は照るとも曇るとも
假令大地は沈むとも
誠の力は世を救ふ
御靈幸倍ましませよ
梅公別の神司
我等二人の姉妹に
傳へ玉ひし嬉しさに
夬身失せし魂は

高天原に甦り
再び花の咲く春に
遇へる心地の今日の旅
此嬉しさは言の葉に
かけて語らん術もなし
かくも尊き御教を
一人の物となさずして
數多集へる皆様に
千別に千別き奉り
其喜と樂しみを
共にせんとの我願ひ
いと平らけく安らけく
聞し召さへと宣り奉る
バラモン軍に名も高き
大足別の軍勢が
トルマン城下に押し寄せて
民を塗炭の苦しみに
おとし入れんとする最中
見るに見兼ねて背の君の
梅公別の宣傳使

駒に鞭ち大野原
進ませ玉ひし留守の中
不束ながら女身を
かりて雨風苦にもせず
世人の爲めに宣傳の
道に上つた次第です
詳き事が聞き度ば
スガの目抜の藥屋の
アリスの宅にお出でなさい
あゝ惟神　々々
恩頼を賜へかし』
ハイ〳〵ドウ〳〵、ヒン〳〵シヤンコ〳〵
駒の嘶き鈴の音
いと勇ましく大道を
緩歩し乍らスガの町
目抜の場所と聞えたる
百萬長者の藥屋の
表を指して歸り行く
あゝ惟神　々々
御靈幸倍まし坐世よ。

（大正一五・五・二一　新六・三〇　於天之橋立なかや旅館　加藤明子録）

瑞月

曇りたる世を照らさんといづ御靈
みづの御靈は天降りましけり
三千年の長き經綸も伊都能賣の
神の守りに開く神代かな

第九章　欠戀坊（一八一八）

吾子の行衛は如何にぞと　待ち焦れたる父親の
アリスの親爺は兩人が　三五敎の梅公別
神の司に送られて　二人ニコ〳〵歸りしゆ
狂喜のあまり逆上し　愈病は重りつゝ
頭痛むと云ひ乍ら　財産全部を投げ出して
奥の間深く隱れけり　ダリヤの姫は驚いて
戀しき父の病をば　癒さん爲にスガ山の
山王神社に夜密か　忍び〳〵に參る詣で

眞心籠めて祈り居る
ほかしてヌッと現はれし
祠の前に悠々と
聲を靜めて告ぐるやう
『吾は尊き三五の
神素盞嗚の尊ぞや
スガの港に隱れなき
萬の民の怨府ぞや
汝の母は逸早く
或る山里へ救はれて

時しもあれや薄暗を
白髮異樣の物影は
近より來り嚴かに

瑞の柱と聞えたる
汝の家は昔より
百萬長者と聞えたる
その罪今に報い來て
この世の中ゆ身を隱し
細き煙を立て乍ら

尼僧生活營みつ
祈り居るこそ憐れなる
アリスは今や重病に
此の難關を恙なく
我の教に從ひて
神代の昔ゆ降り在す
一日も早く詣で見よ
人目を忍び夜の道
答如何』と嚴かに
怪しみ乍ら言葉なく

汝が家の冥福を
しかのみならず汝が父の
罹りて生命危篤なり
切り拔けなんと思ふなら
大谷山の谷間に
榮えの神の御前に
我は汝の案內して
助け行かなんダリヤ姬
宜ればダリヤは首傾げ
思案にくれて居たりしが

パッと輝く火の光
又もや火影はパッと消ゆ
ダリヤの心は動きつゝ
『神素盞嗚大神か
妾にや少しも分らねど
假令鬼神であらうとも
如何なる願もスク〳〵に
御身の後に從ひて
導き玉へと』手を合す
化けたる妖僧はオーラ山
ハッと驚き眺むれば
此の不思議なる出來事に
心定めて答へらく
山王神社の御化身か
人間離れのしたお方
斯ゝる妙術ある上は
叶はせ玉ふ事ならん
何處々々迄も參りませう
神素盞嗚の大神に
岩窟の中に立籠り

善男善女を欺きて
僞天帝の化身なる
山子坊主と知られたり
雀躍りし乍ら言靈も
善哉々々ダリヤ姫
この世を已に去りし如
我眷族を遣して
甦生らせて山奥に
先づ第一に汝が母に
汝が父の重病を
謀反を企みし玄眞坊
僞の救主の成れの果
玄眞坊は胸の裡
いと莊重に宣らすらく
汝の母は三年前
思ひ居れども左にあらず
墓場の土を掘り出し
庵を結び隱しあり
面會させた其上に
救はん爲の我仕組

暗の山道スタ〳〵こ
人跡稀なる大野原
般若心經波羅密經

タラハン城下をさして行く。

從ひ來れと云ひ乍ら
ダリヤの姫の手を引いて
怪しき聲を絞りつゝ
普門品迄唱へつゝ

ダリヤ姫は稀代の賣僧、オーラ山の惡黨玄眞坊とは夢にも知らず、我家にヨリコ姫、花香の逗留し居る事も忘れて了ひ、死んだと思うた母上は、或山奥に生きて居ますと聞きしより虚實を調ぶる餘裕もなく、此妖僧を神素盞嗚の神の化身と深く信じて、夜陰にまぎれタラハン城下を指して出て來たのである。玄眞坊は口から出任せの事を云つて噂に高い藥屋の娘此美人を、うまく、ちょろまかして自分に騙かせ女房に爲し置かば、百萬長者の財産は二人の兄はあつても、そこは何とか、かんとか文句をつけ、自分が一人のものにせんと色と慾との二道かけ、此處迄つり出して來るは來たもの、、さて何處へ連れて行かうか……と心の裡に惱んでゐた。

タラハン川の岸に沿ひたる常磐木の、かなり廣い森林がある。此森林は一方は川邊の事とて、千疊敷の岩が並んで居た。二人は此岩の上に座を占め、川の流れを眺め乍ら休息した。

ダリヤ『モシ、大神の化身樣、母の居りまする山はどの方面で御座いますか、一寸お知らせ下さいませ』

玄眞坊『ウン〳〵ヨシ〳〵、エー……コーット……、あの峰がエー高滿山、それから、その向ふが、エー岸山、川並山、エー、その向ふがタニグク山、ウンあのタニグク山の一寸後に、コバルト色に霞んで居る峰が見えるだらう。あれが大谷山と云つて、

あの籠に、何でエー、汝のお母さんが居られるのだ。そして、其處に榮えの神樣の祠がある。その神樣が願事を何でも聞いて下さるのだ。今其處へ案内しやうが、何分道が惡いから、お前も難澁すると思つて、休み〳〵行く事にしたのだ』

ダリヤ『何ヒマア高い山で御座いますこと、まだ彼處迄は大分道程が御座いませうね』

玄眞坊『さうだ、一寸三十里許りあるだらう、女の足弱を連れて行くのだから先づ三日はかゝる事と思はねばならん』

ダリヤ『ア、左樣で御座いますか、假令三日が十日位かゝつてもお母さんに會へたり、お父さんの病氣が癒えましたら一寸も厭ひません。どうかお願申します』

玄眞坊『これ、ダリヤさん、お前は俺を本當の神の化身と思つてゐるか、それとも賣僧坊主だと思つて居るか、本當の事を聞かして貰ひ度いものだな』

ダリヤ『ハイ、大神樣の御化身にしてはチット許り……斯う申すこすみませんが、お輕いやうでもあり、俗人にしては凡ての點に秀で、御座るなり、山子坊主では到底出來ない妙術を持つて御座るなり、とても妾の如き凡眼では龍の片鱗でも摑む事が出來ません。假令山子坊主にした處で、暗夜に體から光を出したり、四邊を輝かしたりなさる御神德を持つたお方故、お言葉に從つて置けばキット望みを叶へて下さるだらうと信じまして、御案内を願つたので御座います』

玄眞坊『ハハア、成程其方は餘程の才媛だ。拙者を神の化身と信じて跟いて來たのならば、一向面白くないが、假令山子坊主にもせよ、不思議の術を有つて居る其點に憧憬して、跟いて來たとあれや益々頼もしい。それぢや一つ何も彼も打明けて云ふが拙僧こそは天帝の化身、天來の救世主、天下一の名僧知識と自稱する智謀絶倫の英

僧だ、否マハトマの聖雄だ、どうぢやダリヤ姫殿、驚いたであらうなア」

ダリヤ「ホッホ、、、まるつきり、オーラ山の玄眞坊見たいなお方ですな」

玄眞坊「オーサ、さうぢや、拙僧こそはオーラの山に年古く住む大天狗の化身、玄眞坊で御座るぞや」

ダリヤ「ホッホ、、、何ヒマア、えらい馬力ですこと、大變なメートルが上つてゐますよ。さうすると玄眞さん、お前は美人と見れば岩窟へ引張り込んで、否應無しに獸慾を遂げる淫亂上人でせう。母上に會はしてやらうなんて、うまく妾を騙かし、何處の岩窟へ連れ込む算段でせうがなア。もうこれから御免を蒙ります。假令烏にこつかせても賣僧坊主さんにやこつかせませんワ。エー、マー、マア人を馬鹿にして下さつた。今時の女に、そんな僞りを喰ふ馬鹿は御座いませんよ。口惜しいと思召すなら、目なつと嚙んで死になさい、左樣なら」

と捨臺詞を殘し逃げ出さんとした。玄眞坊は、ヒユー〳〵と口笛を三四回吹くや否や、七八人の覆面した荒男、森の茂みより現はれ來り、手とり足とり否應言はさず、玄眞坊と共に野中の道をトン〳〵と、タニグク山の方面目蒐けて擔ぎ行く。

スガの港のアリスの宅では、ダリヤ姫が山王の森に夜中參拜した限り、夜明けになつても歸つて來ないので、門番のアル、エスに命じスガの山の木の間を隈なく搜索せしめたが、何程探しても、影も形も見えぬのに力を落し、その日の日の暮頃、靑い顏して歸つて來た。兄のイルクはこんな事を重病の父に聞かしては益々病が重る計りと召使供によく云ひ聞かせ、病父のアリスにはダリヤ姫の事は少しも話さない事に口止めをして了つた。イルクはヨリコ姫、花香姫の居間を訪ね、

イルク『モシ、ヨリコ姫様、最早お寝みで御座いますか、夜分遅く御邪魔致しますが』

と伺へば中より、優しきヨリコ姫の聲、

ヨリコ『ハイ、未だ寝んで居りません。さう云ふお聲はイルクさんで御座いますか、まづ〳〵お這入り下さいませ。妹は宣傳の草臥で已に寝んで居りますが、お構ひなくお這入り下さいませ』

イルク『ハイ、有難う、然らば御免を蒙ります。エー突然ながら、一寸お智慧を貸して貰ひに参りました。と云ふのは外でも御座いません、妹のダリヤ姫が昨夜半頃、父の重病を苦にして、スガ山の山王の祠に参拝致しました限り、今朝になつても歸り來ず、私も非常に心配を致しまして門番のアル、エスを遣はし、山中隈なく捜索をさせましたが、呼べど叫べど何の音沙汰もなしの礫、日の暮頃力なげに歸つて参りました。若しや悪者にでも拐されたのぢや御座いますまいかなア』

ヨリコ『ヤ、初めて承り實に驚きました、さぞ〳〵御心配で御座いませう。妾は未だ霊眼が開けて居りませんので、何うの、斯うのと云ふお指圖も出來ませんが、コレヤ、キット悪い奴に誑され、何處の山奥へ連れて行かれたのでせう。然し乍ら必ず御心配なさいますな、神様のお守護ある以上は滅多の事はありませんからなア』

イルク『左様で御座いませうかね、折角梅公別の宣傳使様に助けられたと思へば、又悪者に攫れるとは、よく〳〵運の悪い妹で御座います』

と男泣きに泣く。今迄スヤ〳〵眠つて居た花香はフッと目を醒まし、

花香『ア、姉さんですか、いやイルク様、ようお出でなさいませ。貴方のお出ましとも

知らずウツカリと寢て了ひまして、エライ失禮致しました。ダリヤ姫さんの行衛に就て、御相談して居られますやうですが、必ず御心配なさいますな。ダリヤ樣は屹度二ケ月の後にはお歸りになります。妾は今夢を見ましたが、あのオーラ山に立籠つて居つた玄眞坊に拐され、何處かの山奥へ連れ行かれ、玄眞坊は自分の女房にしやうとして、いろ〳〵と骨を折つて居りますが、ダリヤ姫樣は決して彼に汚され給ふやうな事なく、立派な人に送られてお歸りになつた夢を見ました」

イルク「ヤア、そのお夢はキット正夢で御座いませう、六十日と云へば長いやうですが直ぐに經ちます。ぞうか其時迄父が生きて居つてくれゝば宜しいがな」

ヨリコ「一切を神樣に任したお父上、假令御病氣でもお命に別條は御座いません。お宮の普請が立派に出來上つた上に、ダリヤ姫さんはお歸り、お父上は御本復と云ふ事になるでせう。お宮の出來上りとダリヤさんのお歸りとお父上の御全快と「目出度〳〵」が三つ重なつて鶴が御門に巣をかける」と云ふ瑞祥がやがて參りませう。何事も神樣にお任せして時節をお待ち下さいませ」

イルク「ハイ、有難う、夜分にお邪魔致しました、何分宜しうお願申します」

と我居室さして歸り行く。

（大正一五・五・二一　新六・三〇　於天之橋立なかや旅舘　北村隆光錄）

第一〇章　清の歌（一八一九）

夜は久方の空高く
輝き照す月の國
トルマン國のスガの山
千歳の老松苔蒸して
百鳥千鳥朝夕に
御代を壽ぎ千代々々と
囀る聲の勇ましく
樟の古木の梢には
鶯が出て來る巣を造る
常磐の松の色深く
田鶴なき渡り巣をかける
山水明媚の神の山
山王神社の御祠
幾千年の雨風に
破ぶれ歪めど神德は
七千餘國の月の國

隈なく輝き渡りけり
浪を濤へて吹き來る
稲麥豆粟よく實り
家畜一切よく育つ
珍神國と知られける
大高山の峰續き
茂れる見ればトルマンの
神代の姿偲ばるゝ
主のイルクと諸共に
心の色もスガ山の
ハルの湖洋々と
風の香りも馨く
牛、馬、羊、豚、駱駝
神の惠の足ひたる
此國中に聳り立つ
スガの神山鬱蒼と
國の榮のほの見えて
ヨリコの姫や花香姫
村人多く呼び集へ
大峽小峽の木を伐りて

本と末とは山口の
朝から晩迄チョン〳〵と
鋸の聲勇ましく
山王の宮の大前に
岩切り開き清めつゝ
石搗祭を始めたり
今左に述る如くなり。

○石搗き歌

ヨーイ〳〵ドンと打て
スガの神山切り開き
皇大神に奉り
削る忌斧忌鉋
木を切りこなす面白さ
展開したる廣庭の
五色の幣を立て並べ
石搗祭の神歌は

ヨーイ〳〵ドンと打て
スガの町の藥種問屋
地獄の底迄打ち拔けよ
土ひきならし鹽撒いて
下津岩根に搗き固め
龍宮の底の拔ける迄
天地を創造り玉ひたる
常磐堅磐の御舍と
ヨーイ〳〵ドンと打て
スガの港の藥種問屋
產土山の聖場に
神素盞嗚の大神の
月第一の景勝地
上津岩根に搗きこらし
ヨーイ〳〵ドンと打て
スガの港の藥種問屋
仁慈無限の大神が
仕へ奉るぞ尊けれ
地獄の釜の割れる迄
ヨーイ〳〵ドンと打て
天降りましたる瑞靈
嚴の御言を畏みて
バラモン教やウラル教

神の司が幾度も
此聖場も今は早や
ヨーイ〳〵ドンと打て
スガの港の藥種問屋
三五教の宣傳使
オーラの山に立ち向ひ
名も怖ろしき强賊や
凱歌をあげつゝ梓弓
乘合船の其中で
救ひ給ひし聖雄ぞ

尋ね來りて求めたる
輝き渡る世となりぬ
龍宮の底の抜ける迄
ヨーイ〳〵ドンと打て
梅公別の神司
玄眞坊やシーゴーと
賣僧坊主を言向けて
ハルの湖渡らしつ
グリヤの姫の危急をば
此神司在す上は

スガの神山雲深く
鬼や大蛇の攻め來とも
神の光に消え失せん
龍宮の底の抜けるまで
ヨーイ〳〵ドンと打て
天より降りし七夕の
天教山に現れませる
面は白く眉細く
一目拜むも氣がうとく
ヨーイ〳〵ドンと打て

包みて惡魔の襲うとも
如何でか恐れん惟神
ヨーイ〳〵ドンと打て
スガの港の藥種問屋
ヨリコの姫や花香姫
栲機姫か千々姫か
咲耶の姫の再來か
髮は烏の濡羽色
眼も霞む艶姿
地獄の釜の割れるまで

スガの港の藥種問屋
辨天樣の御化身が
此大宮は神德も
月の御國の闇の空
神の御稜威ぞかしこけれ
地獄の釜の割れるまで
ヨーイ〳〵ドンと打て。

ヨーイ〳〵ドンと打て
二人も天降ります限り
日に夜に月に輝きて
清く晴れなん惟神
ヨーイ〳〵ドンと打て
スガの港の藥種問屋

斯くして地鎭祭も濟み、次で立柱式、上棟式、落成式など僅六十日の間に大工、左官手傳人などの精勵の結果遷座式を行ふことゝなつた。待ちに待たる五月五日、彌々スガの宮の落成式を擧行することゝなり、神谷村の玉清別を齋主となし、主人のイルクは神饌長となり、ヨリコ、花香、ダリヤの三人の姫御子は手長をつとめ、八雲琴、箏、篳篥太鼓の聲も賑々しく、無事遷座式を終了した。是よりスガ山の山下なる、神饌田に於て田植式の祭典を行ふ事となつた。祭典の次第を略述すれば、

五月五日早朝祭員一同神の座に着く。土地の農夫等神饌田の畔に列立し、次いで神饌を供し祝詞を奏上し、次に祭員、參詣者一同禮拜し、終つて祭員は撤饌に移る。農夫は神酒を戴き、次に田植の行事に着手す。齋主の玉清別は音頭の發聲をなし、謳歌者聲を次ぐ。農夫等神饌田に入りて耕の式をなし、道歌を歌ひながら神饌田を東西南北に列を作つて進行し、鍬を揃へて神田を耕し、終つて神饌田の正中に幣を立ておく儀式である。

あれみさい　スガの山の—横—雲—
ホーイ　ホーイ　ヤーァホイ　横雲下こそ
私等が祖國—　ホーイ　ホーイ　ヤーァホイ

○

ヤレー見上て見れば　オホー(大)、カン(寒)鳥
ホーイ　ホーイ　ヤーァホイ　見おろせば
スガの名所は船着　ホーイ　ホーイ　ヤーァホイ

○

ヤレー我夫は　河鹿の濱で網を曳く
ホーイ　ホーイ　ヤーァホイ　かゝれかし
九反の網の目緻に　ホーイ　ホーイ　ヤーァホイ

○

ヤレー目出度いものは芋の種　ホーイ　ホーイ　ヤーァホイ
莖長く葉廣く子供數多に—　ホーイ　ホーイ　ヤーァホイ
此樣の床の間にかけし掛物　ホーイ　ホーイ　ヤーァホイ
鴛鴦に千鳥に梅に鶯　ホーイ　ホーイ　ヤーァホイ
此樣の七つの倉の倉開き　ホーイ　ホーイ　ヤーァホイ
白銀や黄金の德利盃々　ホーイ　ホーイ　ヤーァホイ
ヤレー十や七つが柳の下で　芹を摘む
ホーイ　ホーイ　ヤーァホイ　芹はなし柳は撚れてからまーる

ホーイ　ホーイ　ヤーァホイ　十よ七つが待てならレードの出先で
ホーイ　ホーイ　ヤーァホイ　ヤーマ(山)を見てやれ、それでは早い
早ければー、爺の息が切れ候』

愈々耕濟み、水が入ると、此度は早乙女が赤襷十文字に綾どり、美々しき衣服を着飾つて水田に下りる。

○早乙女の歌

代田は富士の山程御座る　日はしんしんと山の端にかゝる

○

オーラ(俺)の所の小旦那は　うす田をこのむ
うす田千石厚田も千石

○

十よ七つ入つ諸舞なれば　月星出でゝ蚊のなく迄も

○

私と汝と何處で田を植ゑ初めた　九下入つのよし家のもとで

○

十よ七つ入つ細田の清水　見る人達が手をかけたがる

○

十よ七つの腰は品よい腰よ　品よい腰に鳴子をつけて

○

日暮し烏は汚い烏よ　上れや終へと笠の上を廻る

○

雷さんは浮氣な神よ　太鼓の撥を質におき
色町通ひをするさうだ。

スガの港の藥種問屋のアリスの家は俄に一陽來復の春が來た。スガの宮は無事建設を終り、アリスの病は拭ふが如く癒え、行衛不明となつて居たダリヤ姫は、神谷村の玉清別に送られて祭典の二日前に歸つて來た。只恨むらくは、梅公別宣傳使の未だ到着なき事であつた。アリスは日の丸の扇を開き乍ら喜び祝して酒宴の席にて舞ふ。

○謠曲

アリス『世は久方の空高く　天の羽衣ふりはへて
スガの御山の奥深く　天降りましたる木の花姫の
神の姿に似たるかな　ヨリコの姫や花香姫
ダリヤの姫の顏は　瑞の靈の帶ばせ給ふ
十束の劍を三段折り　天の安河を中におき
天の眞奈井にふりすゝぎ　ぬなともゆらに取ゆらし
さがみにかみて吹き打ち給ふ　伊吹の狹霧になりませる
市岐島姫、多紀理姫　多紀津の姫のあで姿
今眼の當り拜がむ心地　木枯すさぶ冬の夜に
まがふべらなる老の身の　春に遇ひたる心地かな
仰ぎ敬へ天地の　神の功のたゞならず
月の御國の空高く　輝き渡る日月の

光にまさる如くなり
抑々スガの山元は
皇大神の御舍と
珍の御里なれば
南に高き大高の峰
西に聳ゆる青雲山
天津御神や國津神
仕へ奉りし嬉しさは
あな有難や尊やな
祝へよ〳〵國人よ

イーイーー
遠き昔の神代より
云ひ次ぎ傳へ來りし
北に清けきハルの湖
東に聳ゆる鐘ケ岳
山の屏風を立て並べ
集り玉ふ珍宮と
早や天國に住む心地
勇めよ〳〵家の子よ
千秋萬歳限りなく

國の榮も松翠
國の外まで御惠の
露に霑ふ神代かな。

（大正一五・五・二一　新六・三〇　於天之橋立なかや旅館　加藤明子錄）

瑞月

果てしも知らぬ白雲の
露に霑ふ神代かな

四方山は木の葉さやげど風吹けど
靜かなりけり本宮神山

片磨岩以ちて造りし丸山は
下津岩根も搖るがざるべし

第一一章　問答所（一八二〇）

スガの宮の廣い境内の片隅に問答所と云ふ建物を新築し、ヨリヨ姫、花香、ダリヤ姫の三人が晝夜出勤して居た。さうして表の大看板に「宗教一切の問答所」と筆太に書き記し、其傍に細字にて、

「如何なる宣傳使、修驗者と雖もお相手仕るべく候。万々一妾が說き伏せられし暁をスガの宮の宮仕を辭し妾に勝ちし御方に役目をお讓り可申候也、無冠の女帝ヨリヨ姫」

と書き記しておいた。

大膽至極のヨリヨ姫　猪喰た犬の何處までも

人をば何とも思はない　その心根は歴々と
大看板に現はれぬ　五月雨の空低うして
山時鳥啼き亘り　若葉も老いし夕間暮
異樣の服裝身にまとひ　錫杖ついた修驗者
網笠目深にかぶりつゝ　問答所の玄關に
立塞りて聲高く　頼まう〳〵と訪へば
花香の姫は立出で、　いと叮嚀に敬禮し
『見れば貴方は修驗者　何れの方かは知らねども
ヨリヨの女帝がお待兼ね　・定めて問答せんために
お運びなさつたに違ひない　先頭一のお前樣

シッカリおやりなさいませ　妾は側に侍べりて
高論卓説一々に　拝聴さして貰ひませう
それが妾の第一の　大修業となるのです
早くお上りなされよ』と　盥に清水を汲み來り
草鞋とく〳〵脚絆まで　脱がせて足を洗ひやり
庭下駄渡せば修験者　案に相違の面持で
ニッコと笑ひ庭下駄を　足に引掛け悠々と
境内隈なく經めぐりつ　如何なる事の質問を
出してやらうかと首ひねり　時を移すぞ抜目なき
ヨリコの姫は窓開けて　今訪ひ來りし修験者の

變姿怪態打眺め　思はず知らずホ、、、と
笑ひこけては起き上り　覗きゐるこそあさけなき
修験者心に思ふやう　「大膽不敵の女奴が
大看板を掲げつゝ　人を煙に巻いてゐる
ごんな奴かは知らねども　我足洗うた女奴は
チョイと澁皮むけてゐる　ごこはなしに香しき
匂ひが鼻にプンと來た　何うしても斯しても彼奴をば
俺の女房にせにやおかぬ　さはさり乍ら今晩の
問答にもしや負けたなら　赤恥かいて男さげ
スゴ〳〵歸らにやならうまい　寶の山に入り乍ら

手ぶらで歸るも氣がきかぬ　何とか工夫をめぐらして
ヨリコの姫とか云ふ奴を　木葉微塵に說きくだき
往生させてキユーバーが　威勢をあつぱれ輝かし
三五教の聖場を　うま〳〵占領した上で
スコブツエン宗の本山に　立替すればそれでよい
トルマン國では下手を打ち　千草の姫には生き別れ
男を下げた其揚句　青竹拂ひを喰はされし
風の神でも追ふやうに　田吾作杢兵衛おかめ等に
おつ拂らはれし無念さよ　あつぱれ此處で旗をあげ
會稽の恥を雪がねば　大黑主の御前に

出で、言譯立たうまい　大足別の將軍も
定めて怒つて居るだらう　何か一つの手柄をば
やつて見せねば救世主　教祖の光も暗雲だ」
なぜ、自己愛利己主義の　勝手な事を考へつ
襟をば正し目をするて　玄關さして歸り來る
そのスタイルの可笑しさに　ヨリコの姫は窓の内
又もや笑ひこけ乍ら　一室に入りて顏貌
鏡に向つて髮の風　繕ひおへて白妙の
衣を永く身にまとひ　問答席に立ち出で、
四邊眩く坐しゐたり　花香の姫の案内に

ついて出て來る修驗者
眼は眩み胸おどり
宜る言霊も口籠り
勃發したるあさましさ
我と心を取直し
グッと据付けやゝ反り身
輕く目禮施しつ
バッと開いて『某は
大黒主の片腕と
抑大黒主の神様は
ヨリコを一目見るよりも
舌の自由を失ひて
体内地震は時じくに
斯くてはならじと修驗者
臍下丹田に膽玉を
ヨリコの女帝を睨めつけて
不恰好に出來た口許を
ハルナの都に名も高き
世に聞えたるキユーバーぞや
七千餘國の月の國
片手に握る聖雄ぞ
之皆大黒主のもの
女帝と名のるは何故ぞ
スコブッエン宗の法力で
ハルナの都へ送らうか
探りかぬれど汝こそ
天人天女に擬ふなる
有情男子の肝をぬき
七千餘國の月の國
それと覺つた修驗者
普天の下や率土の濱
その領分に住む汝
事と品とによつたなら
汝を嚴しく捕縛して
如何なる惡魔の化身かは
この世を誑る探女なり
美貌を楯に世の中の
己れ女帝となりすまし
掌握せんとの下企み
返答聞かん」と詰めよれば

ヨリコの姫は高笑ひ　何處の坊主か知らねども
『ホ、、、ホッホ、ホ、、、、
キユーバーと云ふ名は聞いて居る　見ると聞くとは大違ひ
ようマアそんな面をして　世界が渡れて來たものだ
これを思へば世の中は　ホントに廣いものですな
お前の樣な醜面も　下品な姿も世の人は
盲千人の例にもれず　教祖樣よ救世主
なぜと喜び渇仰する　その心根がいぢらしい
スコブッツエン宗と云ふ宗旨　女の乳房をえぐり出し
要寒地帶迄くりぬいて　神の御前に奉る

蒙迷頑固の偽宗教　其方の顏を一目見て
宗旨の全豹分りました　とるにも足らぬお前さんと
問答したとて是非はない　一時も早く尻からげ
尻尾を股に挾みつゝ　逃げて歸るがためだらう
グヅ〳〵してると野狐の　尻尾が現はれまするぞや
スガの宮にや鼻の利く　澤山な犬が居りますぞ
ホ、、、、ホ、、、　あまり可笑しうて腸が
撚れますぞや」と嘲弄へば　キユーバーは團栗眼に角をたて
肩を四角に聳やかし　鼻息荒く腕まくり
握り拳を固めつゝ　力限りに卓を打ち

コップの水を踊らせつ　一口飲んで息をつぎ
ヨリコの顔をいやらしく　下からグッと睨め上げて
『ホンに素敵な女郎だなア　俺も諸國を遍歴し
澤山な女に會うたれど　お前のやうな奴轉婆を
一度も見付けた事はない　それだけ度胸があるならば
神さん等に仕へずと　オーラ山へでも飛んで行て
ホントのヨリコに面會し　お弟子になつて泥坊の
仮焚なりとするがよい　ホンニ呆れて物言へぬ
愛憎もこそも月の國　七千餘國のその中に
之程きつい女郎あらうか　ハッハ、、、、』と苦笑ひ
すればヨリコはキッとなり　三千人の泥坊の
『玄眞坊やシーゴーの　しやくつて使うたヨリコとは
大頭目を此の腮で　驚く勿れ驚くな
此姐さんで御座るぞや　惡魔の道を廢業して
オーラの山を解散し　吹き來る風に魂を
水さへ清きハルの湖　神の誡の取次と
清めすましてスガの山　如何なる惡人なればとて
忽ち變るヨリコ姫　至善至美なる增鏡
神に貰うた魂は　あんまり輕蔑なさいますな』
研げば光る人の魂

初めて明かす其素性　　聞くよりキューバーは仰天し
呆れて椅子からドッと落ち　尻餅ついて腰痛め
アイタ、タッタア、痛い　藥よ、水よ、繃帶と
ワザとに駄々をこねまわし　何とかなして此美人
住まへる宿に一夜の　伽をなさんと企むこそ
大膽不敵の曲者ぞ　ヨリコの姫はキューバーが
心の底まで探知して　そしらぬ顏を粧ひつゝ
煙草をスパ〳〵輪に吹きつ
『これ〳〵花香よ、ダリヤさん　此處に一人の行倒れ
賣僧坊主が居りまする　蓆の破れでも持つて來て
頭から尻までよく包み　雪隱の側へ持ち行きて
其處に寢かして置きなされ　スコブッエン宗の小便使
天下を騙詐る糞坊主　雪隱の側が性に合ふ
ホ、ホッホ、ホ、、、』　笑ひ殘し悠々と
扇に片頰あほぎつゝ　我居間さして入りにけり
キューバー此態見るよりも　剛腹立ちて堪り得ず
ムックと起きて胸倉を　摑み懲しめやらんとは
思ひ焦れど肝腎の　腰の蝶番脫骨し
無念をのんで兩眼を　剝き出し乍ら時ならぬ
涙の雨に浸りける　夜はシン〳〵と更け渡り

夜半を報ずる太鼓の音　七五三と聞え來る
花吉、ダリヤの兩人は　澁々夜具をとり出し
キューバーの上に被せつゝ　各自寢室に入りにける
あゝ惟神々々　神の仕組ぞ面白き

（大正一五・五・二一　新六・三〇　於天之橋立なかや旅館　北村隆光錄）

第一二章　懺悔の生活（一八二）

大黒主を笠に被て　七千餘國の月の國
我物顏に振舞ひつ　大足別の軍勢を
片手に握り片手には　スコブッエンの經典を
力となしてトルマンの　神の國をば振り出しに
タラハン城やデカタンの　大高原に散布せる
數多の國々悉く　我の掌裡に握らんと
心驕りしキューバーも　天運茲に盡きたるか
三五教の宣傳使　梅公別の神力に

千辛萬苦の計畫も
寄邊なく〳〵大野原
吹き來る風に髮の毛を
スガの港に來て見れば
山王の神の舊跡に
珍の御舍千木高く
ハルの湖邊に影寫し
舌を捲きつゝすた〳〵と
輕き扮裝草鞋ばき
金剛杖をつきながら
根本的に破壞され
雨に衣はそぼち濡れ
梳りつゝ漸くに
前代未聞の大慶事
三五敎の大神の
鰐木さへもきら〳〵と
眩き許りの光景に
此世を忍ぶ蓑笠の
手被脚絆を身に纏ひ
爪先上りの山道を

あえぎ〳〵て上り見れば
社の傍に建てられし
さも宏壯な大道場
宗敎問答所と筆太に
書き記したるに目をつけて
思はずにやりとほくそ笑み
宗敎問答に對しては
是だけ廣い月の國
キユーバーの右に出づるもの
只の一人もなかるべし
いよ〳〵天運循環し
一陽來復時到る
神の光もいや長く
八千代の椿優曇華の
花咲く春に遇ふ心地
あゝ面白し〳〵
坊主鉢卷締め直し
如何なる奴かは知らねども
高が知れたる女ども
奮戰激鬪秘術をば

盡して挑み戰へば
風に木の葉の散る如く
春の氷の解くるごと
影も形もなき崩れ
雲を霞と逃げ出すは
如何なる女か知らねども
神德無双のキユーバーが
相格崩して笏を捨て
謝り入つて我弟子に
歎願致すに違ひない

何の手間暇要るものか
旭に露の消ゆるごと
スカ屁を放つたるその如く
尻はし折つて一散に
今目の當り見るやうだ
天下唯一の救世主
舌鋒にかゝつちや耐るまい
大地にパッたと鱠伏して
何卒加へて下さいと
あゝ面白い〳〵

五月の空は曇れども
日月天に照る如く
輝き渡らん神の國
なぞと高をぱくゝりつゝ
立ちて樣子を窺へば
花香の姫に迎へられ
ハートに波は打ち乍ら
庭下駄履いて境内を
作戰計劃備へつゝ
舌端火を吐きヨリコ姫

キユーバーの心の空晴れて
スガの山下宮の棟
占領なさんは案の内
問答所の玄關に
花に嘘つく美婦人の
ハッと驚き眉を寄せ
素知らぬ顔を裝ひつ
參拜すると云ひ乍ら
いよ〳〵これから正念場
煙に卷いて吳れんずと